協賛企業	テーマ記号	テーマ	生徒の応募企画タイトル
アイチコーポレーション	AC5	高所作業車の新たな使い道の提案 アクティビティ展開、観光展開、新たな使い道…	【アクティブに遊べ、どこでもバンジー！】
ドウシシャ	DS2	つい贈りたくなるカジュアルギフトの新しいカタチ！	【プレゼントムービー】 【簡単に作れて贈れる！おじいちゃんおばあちゃんのハッピーギフト！！】
	DS4	フライパン・鍋・包丁に続く『新しい調理用品』の新商品企画！	【災害時でも赤ちゃんのミルクを飲みやすい温度で作れる電気湯煎機】 【料理の面倒くささを解消!!】
ハウス食品	HS1	カレーに関する新事業の提案	【いまだかってないカレーの作成】
	HS3	ハウスとんがりコーンの新たな挑戦 （製品、サービス、娯楽等）	【とんがりコーンがアイスに挑戦！】 【とんがりコーンが移動式カフェ経営するらしいで！】
	HS4	ハウスフルーチェのブランド価値を高める ビジネスプランの提案	【フルーチェアイデアコンテスト】 【フルーチェアレンジレシピコンテスト　通称　フルコン　の開催】
ソフトバンク	SB1	ビックイベント（オリンピックなど）における 外国人観光客向けサービス	【正確な情報で楽しい旅行を】 【東京オリンピックで東北の復興を】
	SB4	安全なスマホ利用を実現する新サービス	【～もう、スマホが割れない時代へ～】 【生体認証に次ぐ！？スマホにありそうでなかった認証方法！」】 【データ移し替え安心スマホ！】
	SB10	デジタルによる新しい健康サービス	【お得にダイエット！】 【新時代の必需品で高齢者の生活に革命を】
センコーグループホールディングス	SK2	センコー、ホテル事業に挑戦！宿泊者（外国人観光客・レジャー客含む）向けの新サービス・企画の提案（2020年開業予東京・潮見駅前）	【より思い出に残るホテルにするための提案】 【空き家でプチホームステイ】
	SK4	センコー、カフェに挑戦！「花カフェFLOWA宝塚店」における新サービス・企画の提案	【お花のステージ、開幕。】 【ギフトの新提案「お花のギフトセット」】

表１．２０１９年度　ＫＵＢＩＣ応募企画一覧

（ｂ）２０２０年度　新型コロナウイルス感染症拡大により、コンテスト自体が中止

（ｃ）２０２１年度

協賛企業・団体は、吹田市（大阪府）、センコーグループホールディングス、日本経営、ハウス食品、富士通の５社、出題テーマは全１７テーマであった。表２は生徒が実際に応募した企業・テーマ・企画タイトル一覧であり、ＳＤＧｓを意識した企画は赤字の１２個と、２０１９年度に比べ大きく増加している。

協賛企業	テーマ	生徒の応募企画タイトル
富士通	理想の遠隔授業とは？ ～遠隔授業への課題を解決しよう～	【オンラインを生かしてできること】 【遠隔授業を義務教育に組み込む】
ハウス食品	ハウスとんがりコーンの新たな挑戦 （製品、サービス、娯楽等）	【Taste Park】　【まるがりコーン】 【とんがりコーン ブラックペッパー味】
	ハウスフルーチェのブランド価値を高める ビジネスプランの提案	【SNSを使ったマーケティング戦略】【フルーチェ ブランド向上大作戦】 【ハウスフルーチェを幅広い年齢層に】 【フルーチェ、まさかのコラボ！？～あのアニメとの夢の共演～】
	健康長寿社会の実現へ向けて 食関連ビジネスプランの提案	【おらに元気を分けてくれ！仙豆で生きよう健康に！】 【フードバンク活動で健康長寿社会実現を目指す】 【乳酸菌で健康促進】
	食に関する変化や社会問題を解決する新事業の提案 （食の外部料、簡便化、食品ロス、 孤食、欠食、ニューノーマル社会　等）	【～みんなで楽しく～孤食ゼロの未来へ】 【あなたと防ごうフードロス～一石二鳥～】 【食材から作るカレー作り】 【食品ロスを減らし家庭の家計を助けるプラン】 【余ったヨーグルトで簡単！ヨーグルトパンナコッタ】
日本経営	100%寄付金だけで病院経営を成立させるための戦略	【共助医療団体助け合いの縁】
	子どもの教育格差の改善に向けたビジネスプラン	【ボランティア学習無料塾】
	コロナ時代のオフィス活用プラン	【サテライトオフィス】
センコーグループホールディングス	宅配事業における新たなサービスの提案 ～ラストワンマイル克服のための提案など～	【位置情報の共有～再配達０の実現へ～】
	食のトレンドや健康を意識した新サービスの提案 ～回転寿司、ダイニングレストランほか飲食店への提案～	【アレルギーを無くそう！】 【回転寿司減塩計画】
吹田市（大阪府）	市長、これからの社会にはこれが必要なんです ～社会を変える新しい公共ビジネス～	【大阪うまいもんグランプリ略して「ＯＵＧ」大作戦】 【後悔しない選択を】

表２．２０２１年度　ＫＵＢＩＣ応募企画一覧

イ　高校生ビジネスプラン・グランプリ（日本政策金融公庫主催のコンテスト）

このコンテストは、活力ある日本創り・地域活性化を目指すため、次世代を担う若者の創業マインド向上を目的とした全国規模のコンテストである。『人々の生活をより良いものに変えるプラン』、『世の中の仕組みをより良いものに変えるプラン』、『地域の課題を解決するプラン』など、チームを組んで高校生ならではの自由な発想や創造力を活かして企画を応募している。書類審査終了後は、全ての企画に対して審査員からのフィードバックが返ってくるため、次のコンテストに活かすことができる。

（ａ）２０１９年度

実際に生徒たちが企画した内容（表３）を見ると、全体的に自分たちの生活の中で生じる困り感を基に企画を考えているようである。

タイトル	概　要
けった	携帯を充電できる自転車の付属品の販売するという企画。アプリと連動し消費したエネルギーのグラフ化・溜いだ分だけポイントを付与する。
Steps points	運動不足を解消するためのスマートフォンアプリを開発する。歩くことで健康維持を目指す。歩数などでポイントを獲得することができ、スーパーのクーポンとして利用できる。
ムーブＵＰ	通学や通勤などの移動でポイントを得ることができ、そのポイントをクーポンに交換したり換金したりできるアプリを開発する。時間を無駄にせずに少しでも得できるアプリ。
ここだよ知ーる	「ついついなくしてしまう」という状況を解消するための発信機型シールを開発する。高齢者の物忘れによる紛失被害を減らす目的を兼ねている。
Angelwhite	日焼け対策や日焼け後のケアができる美白サロンを立ち上げるという企画。
すずＴｉ－	汗をかきやすい人に向けた、涼しくて、速乾性があり、汗臭くなりにくい新感覚Tシャツ。
全力スポーツ応援アプリ	プロと自分の投球フォームやバッティングフォーム、走っているフォームを見比べ、改善すべきポイントがわかるアプリを開発する。スポーツをする学生の悩みを解決する。

表３．２０１９年度　高校生ビジネスプラン・グランプリ応募企画一覧

（ｂ）２０２０年度

新型コロナウイルス感染症拡大により、コンテスト自体が中止

（ｃ）２０２１年度

２０１９年度と比べ、日常の困り感を解消するなかで環境に配慮した素材を使用したり地域活性化に繋げようとしたりと、視野を広くもった企画が多くみられる。中でも【三重県に大学を～学生の定住と第一次産業の活性化～】については、自分たちが住んでいる地元に目を向け、その地域の課題や資源を洗い出し、地域の魅力を最大限に引き出したうえで課題を解決していくという企画を考えている。

タイトル	概要
MIERU	シャープペンシルの不満を解消したシャープペンシル。 ＜使いやすい点＞・残りの芯の長さが見える・消しゴムが長く使える・カチカチ鳴らない・消しゴムの汚れが目立たない・環境に優しい素材でできている
自転車カッパ！？ ～かっぱの常識を覆す～	自転車に備え付けのかっぱで雨が降ってもかっぱを着なくても濡れることなく移動ができる、従来のかっぱとは大きく違ったかっぱの進化系商品。
三重県に大学を ～学生の定住と第一次産業の活性化～	過疎化が進んでいる三重県南部に人を呼び込むため、漁業についての生産・加工・販売について学ぶことができる大学を設置するという企画。地元企業と協力し、実習やインターンシップを行うことによって学生が地域の魅力を知るきっかけを増やし活性化を図る。また、学生・地域・大学が協力し、生産・加工・販売を一貫して行う六次産業化に取り組むことで漁業従事者の収入の安定を図る。
Oil Catcher	排水溝に取り付けるごみ取りネットに、油だけを吸い取る特殊な素材であるナノファイバー素材「マジックファイバー」を搭載し、排水溝から海に流れ出る油を無くすという企画。ＳＤＧｓ１７の目標である「海の豊かさを守ろう」と「つくる責任つかう責任」に繋がる。
脱プラスチック！ 潤そう地球と喉を	近年問題視されているプラスチックの消費を減らすため、イギリスやアメリカで進んでいる無料冷水器（ウォーターサーバー）の設置を都市を中心に行っていくビジネス。
あなたと私距離感大丈夫そ？	パソコンなどの端末と顔の距離を測り、適切な距離を教えてくれるという器機を開発する。液晶画面から発生するブルーライトの影響で、視力低下や疲労など人体に悪影響が出ることを防ぐ役割を担う。
サイバー攻撃の対策を マンガで分かりやすく広めよう	サイバー攻撃に関連する漫画を作成しＴＶで放送することで、サイバー攻撃に対する意識を高め被害の拡大を抑えようという企画。
待機児童をなくそう	福祉系の高校や専門学校に、こどもが暮らせる施設を作り、その施設で実習を行うというかたちで学校の生徒や先生に面倒を見てもらい待機児童をなくそうというビジネスプラン。

表４．２０２１年度　高校生ビジネスプラン・グランプリ応募企画一覧

ウ　「プレゼン龍２０２０」×ＳＤＧｓ（龍谷大学が開催するコンテスト）

２０２０年度は、コロナ禍の影響を受けてＫＵＢＩＣおよび高校生ビジネスプラン・グランプリが中止となったため、代替できる取り組みとしてこのコンテストに参加した。本事業をスタートして２年目になることもあり『世界中に存在している解決すべき社会課題（貧困や飢餓、健康、福祉、エネルギー、自然など）を身近なところから考える場とし、Ｗｉｔｈ／Ａｆｔｅｒコロナの世界を生きる私たちのツールとなりうる、ＳＤＧｓの観点から社会問題を解決するビジネスプランを募集します。（募集要項より一部抜粋）』というコンテスト開催の目的に共感し、このコンテストに参加することを決定した。入賞者は出なかったが、全員がＳＤＧｓを意識し考えるきっかけをつくることができた。以下、実際に生徒が応募した企画書の一部を紹介する。

第15回龍谷大学 高校生ビジネスアイデアコンテスト

★ビジネスアイデアのタイトル(アイデアのテーマを20字以内で書いてください。)

Sustainable ビニール傘 Use

★SDGs17のゴールのうち、ビジネスアイデアがどの項目に当てはまるか(複数回答可能)

□ 目標1　□ 目標2　□ 目標3　□ 目標4　□ 目標5　□ 目標6　□ 目標7　□ 目標8　□ 目標9
□ 目標10　□ 目標11　☑ 目標12　☑ 目標13　□ 目標14　□ 目標15　□ 目標16　□ 目標17

★ビジネスアイデアの概要(アイデアの特色やひらめいたきっかけなどを300字以内でまとめてください)

異常気象で天気の予測がしにくい今、急に振り出す雨に、コンビニや駅でその場をしのぐためビニール傘を買い、使い終わったらすぐ捨ててしまう。このままではビニール傘のごみは永遠に減らないし、問題になっているプラスチックゴミの増加を後押しすることになる！と思い、案を思いつきました。ビニール傘専用のごみ箱【使い終わり箱】をコンビニや駅など雨が降ったときにビニール傘を買いたいと思う場所に設置する。新しくビニール傘を生産する量を減らし、使用後（直す必要があるもの）のビニール傘の再生をする。

★アイデア表現欄(アイデアやアイデアの実現方法を写真やイラスト、説明文などで具体的に説明してください)

雨が急に降ってきたとき、傘を持参していなかったら、ビニール傘を買ってその場をしのぐ方が多いと思います。そこで、ビニール傘の在り方改革をしたいと思います。それは【使い終わり箱】の設置です。

① 急な雨で傘がなくビニール傘を買います。
② そのビニール傘を使い終わります。
③ 捨てる、または持ち帰るのを忘れます。

従来のこのサイクルを繰り返していては、ビニール傘のごみは一向に減りません。なので、新しいビニール傘の利用サイクル【Ｓ ビ Use （エスビーユーズ）】を提示します。

① 急な雨で傘がなくビニール傘を買います。
② そのビニール傘を使い終わります。
③ コンビニや駅に設置されている【使い終わり箱】に入れます。
④ ビニール傘製造会社と協力し、ビニール傘の再生（消毒殺菌したり、リメイクしたり）をします。（将来的にはビニール傘製造会社の作業内容を、新品を作るより再生する方がメインになるようにしたい。）
⑤ もう一度ビニール傘を売ります。急いでいる時でもリメイクされたものが、どれかわかるようにタグなどを利用し示し（色で区別するなど）、リメイクされた回数（使われた回数）が多いものほど安い価格で手に入れられるようにします。
例：一回再生されたものを買う場合→１０％引き
　　二回再生されたものを買う場合→２０％引き　　のようにする。
⑥ 人々は新品のビニール傘ではなく、再生されたビニール傘を買います。
⑦ そのビニール傘を使い終わったら【使い終わり箱】に入れもう一度使えるようにします。

私は、このビジネスプランを実践することで、ごみを減らすことを目的にビニール傘をごみにせず何度も使う社会を当たり前にしたいと考えています。さらに、何度も、買っては【使い終わり箱】にビニール傘を入れ、より安いものを手に入れることを繰り返しているうちに、【毎回、ちょっとのために新品を買っているもったいなさ】や【毎回お金を払っているもったいなさ】も感じてもらいたいと思っています。そうすれば、一度買った傘をごみにせず、大切に扱うことができると思うからです。

第15回龍谷大学 高校生ビジネスアイデアコンテスト

★ビジネスアイデアのタイトル(アイデアのテーマを20字以内で書いてください)

楽しく！楽に！楽々ショッピングカート

★SDGs17のゴールのうち、ビジネスアイデアがどの項目に当てはまるか(複数回答可能)

□ 目標1　□ 目標2　□ 目標3　□ 目標4　□ 目標5　□ 目標6　□ 目標7　□ 目標8　□ 目標9
☑ 目標10　□ 目標11　☑ 目標12　□ 目標13　□ 目標14　□ 目標15　□ 目標16　□ 目標17

★ビジネスアイデアの概要(アイデアの特色やひらめいたきっかけなどを300字以内でまとめてください)

「買い物カゴに入っている商品は全部でいくらだろう」「レジに並ぶのが面倒くさい」と思ったことはありませんか？主婦をはじめとした、消費者の小さなストレスを軽減させるサービスの一環として、このアイデアを思い浮かべました。

私が考えたアイデアは、様々な機能が搭載されており、その中でもカートに置くだけ決済をしてくれるサービスがあります。RFIDタグを使用することで、買い物を時間短縮かつ予算内に収めることができると予想されます。また、電子タグは非接触の無線通信により、商品をまとめて読み取れるため、現在のコロナ禍において、買い物の際の感染リスクを防止できる期待もあり、さらに今後需要が高まっていくと考えています。

★アイデア表現欄(アイデアやアイデアの実現方法を写真やイラスト、説明文などで具体的に説明してください)

【サービスの一覧】

－タッチパネル画面－

・購入商品一覧ボタン（右上）
→買い物カゴ内の商品の一覧や合計金額を表示
・お買い得商品（左上）
→賞味期限間近の値引き商品を一覧にする
陳列マップと連動
☆食品ロスの削減効果も期待できる
・¥（予算差異）表示（左下）
→はじめに予算を入力し、自動で予算と購入予定金額の差額を表示
・決済ボタン（右下）
→スマートフォンでの「電子決済」と
無人レジでの「現金払い」のいずれかを選択

＜メリット＞

・瞬時に合計金額を出せることにより、各自の予算内に収め、想定外の出費を抑えることができる。また、買いすぎを防いだり、廃棄しなければならない食品の量を抑えたりし、無駄削減や食品ロス問題の解決にも貢献できる。
・決済をする際に、レジ待ちの長蛇の列に並ばなくてもよいため、忙しい人やせっかちな人には時間ロスを最小限に抑えることが可能になる。さらに、店員と対面になる頻度が激減するため、サービスの利用を推進していくことにより新型コロナウイルスの感染拡大防止対策にもつながる。
・様々な言語に対応した翻訳機能が搭載されているため、海外の顧客にもサービスを広げることが可能。

＜決済の流れ＞

現金払いの場合
① 現金払い画面に移動
② 画面上に QR コードが表示される
③ 無人レジに移動しタッチパネルを取り外し読み込む
④ 購入金額を支払う
⑤ 決済完了♪

電子決済の場合
① 電子決済画面に移動
② 画面上に QR コードが表示される
③ スマートフォンで読み取る
④ 決済完了♪

図１．２０２０年度　「プレゼン龍２０２０」×ＳＤＧｓ応募企画

エ　キャリア甲子園（株式会社マイナビが開催するコンテスト）

このコンテストは高校生学年不問型のビジネスコンテストである。チームを組んで、協賛企業が出題するテーマの中から興味・関心を持った企業テーマを選択し、その課題に対する企画を応募している。２０１８年度に初挑戦し、同年に準決勝大会（東京開催）に出場している。９月に企業からのテーマが出揃い、１１月下旬の書類審査に応募し、１月のプレゼン動画審査、２月の準決勝大会と勝ち進むと３月に東京で行われインターネットでも生中継される決勝大会に出場できるという日程になっている。本講座では、このコンテストを１年間の集大成を発揮する場として位置づけている。表５は２０１９年から２０２１年の協賛企業とテーマ一覧である。

２０１９年度【MY REVOLUTION!!】		２０２０年度【Breakthrough】		２０２１年度【Re:Creation】	
協賛企業	テーマ	協賛企業	テーマ	協賛企業	テーマ
東京電力	毎日の生活が楽しくなるインフラを使ったイノベーティブなサービスを普及させよ	東京電力	安心して快適に暮らせる災害に強いまちづくりを目指し、自由な発想で新たなサービスを提案せよ	東京電力	カーボンニュートラルな未来の実現を目指し、自由な発想で新たなサービスを提案せよ
バイエル	半世紀以上にわたって障がい者スポーツチームを保有しているバイエルが日本でパラスポーツの観戦率を持続的に向上させていくことに貢献する施策を考えよ	バイエル	世代や性別、そして育児や介護などの状況もさまざまに異なる人たちが、生活環境の変化のなかで、継続的に企業で働くことを可能にする施策を考えてください	バイエル	持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）に沿い、バイエルがサステナビリティに一層注力することにより、「人々の医薬品へのアクセス向上」または「農業生産者の安定的な食糧生産」につながる新たなビジネスを提案してください
生命保険協会	『20年後の社会における安心とは何か』を考え、デジタル技術を使った生命保険会社のサービスを立案せよ	生命保険協会	生命保険会社の強みを生かし、人生１００年時代における社会課題を解決する新しいサービスを創出せよ	生命保険協会	「生命保険会社が提供する安心」とは何かを再定義し、これまでにない新しいサービスを提案せよ
資生堂	資生堂が持つ資産を活用して、社会課題に 応える 商品・サービスを提案せよ	ピップ	今後大きく変わる消費者行動の変化のなかでスリムウォークの新しいマーケティングプランを提案せよ	コーセーコスメポート	日常生活や価値観が劇的に変化する中、サンカットブランドが日本の高校生に圧倒的に支持されるように、Z世代の価値観を活かした新たなプロモーションを提案せよ
ZOZOテクノロジーズ	10 年後の未来に存在する AI や新テクノロジーを使って世界中で大ヒットしている ファッション ECサービスを企画せよ	三井住友カード	キャッシュレス決済比率が４０％になった社会においてキャッシュレスを起点にしたあなたたちのライフスタイル・価値観を提案してください	LG Electronics Japan	１０年後のノートパソコンの価値とLG gramの強みを融合させた新しいサービスを提案せよ
キヤノンマーケティングジャパン	キャノンのミニフォトプリンター"iNSPiC"を使った高校生ならではの楽しみ方を開発し、それを広める方法を提案せよ	日本ユースホステル協会	afterコロナ時代を見据え、日本の学生が旅に出たくなるような新しい旅行・宿泊施設の仕組みを提案せよ	鹿島建設	鹿島がこれまで担ってきた役割を踏まえ、20年後の社会に新たな価値を創出するビジネスを自由に提案せよ
JAL（日本航空）	ＳＤＧｓ の 17 の目標を元に、ＪＡＬの強みを活かした革新的な取り組みを立案せよ！				

（ａ）２０１９年度

この年は本事業をスタートした年であるが、書類審査に応募する１１月末までにワークショップなどを実施してＳＤＧｓという概念が浸透したこともあり、６月のＫＵＢＩＣに取り組んだ時よりもＳＤＧｓを意識した企画が多く見られた。例えば、資生堂に提案した【Ｆｒｅｅｌｙ！】という企画では「５．ジェンダー平等を実現しよう」を、ＪＡＬに提案した【昆虫食は未来の食を救う！！】では「２．飢餓をゼロに」を意識した企画となっている。他にも、女性の社会進出に伴う悩みを解決する企画などもある。まだまだ１７の目標を表面的に捉えたという段階ではあるが、難しい課題にも積極的に取り組もうとする姿勢が見られた。残念ながら書類審査を通過する企画はなかったが、次年度への期待が膨らむ取り組みとなった。

企業	企画タイトル	概要
バイエル	パラスポーツの魅力を伝える。	バイエルに所属している選手と協力してCMを作り、バイエルの宣伝＆パラスポーツの観戦率のＵＰを図る。
資生堂	Ｆｒｅｅｌｙ！	SDGsのジェンダー平等を実現しようという目標に向かって、CM作成を行う。
	Make My Make：)	メイクの時間短縮を図るため、既存の製品（顔パック）に資生堂のベースファンデーションを融合させた製品の開発。一度のパックでファンデーション工程まで完成させる。
	働く女性に、希望を	社会で活躍する、働く女性の悩みを解決することで社会課題の解決に繋げるため、資生堂の資産であるシャンプー・リンスを 活用して女性の命である「髪」の悩みを解決する専門家常駐型のサロンを設置する。
ZOZO	理想のファッションを実現する未来へ	自分でオリジナルの服をデザインすることができ、雰囲気や流行からおすすめのコーディネートを表示する機能を持つＷＥＡＲを拡張したＥＣサービスを提供する。さらに、持っている服を登録すればその服を活用したコーディネートが表示されるなどの機能も持つ。
キヤノン	iNSPiCコンテスト	年に一度iNSPiCで撮影した写真を組み合わせて作るモザイクアートコンテストを開催する。iNSPiCの思い出を残すための便利な機能を最大限に活用した話題性のあるコンテスト。
JAL	昆虫食は未来の食を救う！！	JALで昆虫（コオロギ）を飼育し、機内で昆虫食の提供をする。コオロギ粉を使用したたこ焼きやお好み焼きなどから始め、徐々に昆虫食を広めていく。また、JALで飼育したコオロギを昆虫食の業者に提供し利益としても成り立つようにする。

表６．２０１９年度キャリア甲子園応募企画一覧

（ｂ）２０２０年度

例年ならば、キャリア甲子園までに２つのコンテストに応募して創造力や企画力、知識をしっかりと蓄えたうえで挑戦することができる。しかし、２０２０年度はコロナ禍の影響を受け、個人応募で１つのコンテストにしか取り組めておらず、企業テーマを選択した後、アイデアを考えるという段階で躓いているチームが多かった。しかし、日本ユースホステル協会に提案した【Job 旅】では「８．働きがいも経済成長も」や「９．産業と技術革新の基盤をつくろう」の解決に繋がる内容になっており、その新しい発想で準決勝大会まで進出することができた。その他、同じく日本ユースホステル協会に提案した【宝探しトラベル】では、旅を通して地域の魅力を再発見できるような企画となっている。

企業	企画タイトル	概要
東京電力	Ｌｉｆｅ　Ｐｒｏｔｅｃｔ	東京電力が蓄積した日本の地図や雨雲の情報を活用し、ハザードマップだけでは見ることの出来ない最新の細かい情報をアプリで提供する。
バイエル	Verita	労働方法に定時制に加えフレックスタイム制の併設を推奨し、社内一括管理アプリでスケジュール管理や社内管理を行う。
	三本の矢	病院、介護施設、育児施設の提携を行い、保護者や介護者の負担を減らす。
	プロチェーン政策 ～Proceed(進む)+Chain(繋がる)～	働きたい人と働き手が欲しい企業を市町村を中継して繋ぐシステムの構築。働き手を増やすことで、地域活性化にも貢献することができる。
ユースホステル	自分探しの旅へ	約１か月の期間で週に３日間はインターンシップを行い、残りの２日間は自分探しの旅をするという企画。
	宝探しトラベル	挑戦者は地元住民から与えられる情報をもとに、その土地ならではの特産物や名所を探していく企画。旅をしている風景をネット配信してもらうことで、地域活性化にも繋げる。
	TOBO旅～TOugh times Bring Opportunity～	日本国内で外国人と関わり、語学力を高めることができるような短期留学体験の旅を提供する。国内で気軽に留学体験をすることで、グローバ ル社会で活躍できる人材を育成する。
	Ｊｏｂ旅	ユースホステルを拠点として特産品産業やサービス業を行っている場でインターンを行う。今までになかったホステル会社が職業体験場所を提供して行う新しいインターン制度。

表７．２０２０年度キャリア甲子園応募企画一覧

（ｃ）２０２１年度

本年度に書類審査を通過した企画の１つで、東京電力に提案した【Ｗｉｎ－Ｗｉｎ Ｄｒｉｎｋ】は、ペットボトルレスの自動販売機を普及させることで「１２．つくる責任、つかう責任」を達成できるよう意識されている。そして、準決勝大会に進んだコーセーコスメポートに提案した【そのひと押しで保つ、美白。】は、企業からの課題に応えるだけでなく、そこにごみの削減や環境に配慮した要素を取り入れるなどの工夫が織り込まれた企画となっている。また、ＬＧ Ｅｌｅｃｔｒｏｎｉｃｓ Ｊａｐａｎに提案した【誰もが学べる環境を】では、特に「４．質の高い教育をみんなに」を意識した企画となっている。

企業	企画タイトル	概要
東京電力	Win-Win Drink	日本全国の自動販売機でペットボトルを使わず、消費者はマイボトルを使うという企画。最終的には環境に優しく消費者にもメリットのあるwin-winなものを目指す。
コーセーコスメポート	日焼け粧水止め	日焼け止めを塗るのが「面倒くさい」を軽減するために日焼け止め成分を含んだ化粧水を開発。
	美容の新しい時代へ	日焼け止めに関する講座を大型ショッピングセンターなどで開催する。豊富な種類の日焼け止めのサンプルを活用し、体質や肌質に合うものを見つけやすくする。
	そのひと押しで保つ、美白。	「高校に日焼け止め専用の自動販売機を設置する」いつでもどこでも日焼け止めを購入できることで、高校生からの支持率アップが期待できる。
LG Electronics Japan	sky ouch	ディスプレイを空中に映し出すものを開発し、ノートパソコンの機能の一つとして追加。また、飛び出た液晶を特殊な手袋を手に付けて操作することもできるという未来の製品を開発する。
	よりよい使用体験をあなたに	スタンド、スマホでPCの画面を操作できる機能、ルーター内蔵の３つの機能を搭載したPCの開発。およびゲーミングPCの開発。
	誰もが学べる環境を	ＬＧが学校等の教育現場と連携し、学校の教室と学校に行けない生徒のLGｇramを繋ぐことで学校に行けない人が学校にいるような気持ちで同じ授業を受けることができ、友達とも話すことができるという企画。「誰もが平等に学べる環境を作ること」が目的。
鹿島建設	救える命を救う	デジタルツインで得た情報が、ある一定の数値を超えた場合、病の可能性ありと判断し遠隔操作にて、自動的に消防署に連絡がいき、救急車が出動するという企画。

表８．２０２１年度キャリア甲子園応募企画一覧

（３）２０２１年度の取り組みを振り返って

本講座でＳＤＧｓ自体を学習した時間は、年度初めに【ＳＤＧｓジャーナル】が配信している『ＳＤＧｓとは？【アニメでわかるＳＤＧｓ】』を視聴して追加説明をおこなった３０分程度である。しかし、コンテストのテーマや協賛企業からの課題自体がＳＤＧｓを意識させるものが増えてきているためか、こちらから積極的に仕掛けなくても生徒たちは自らＳＤＧｓに関連した課題を選択していた。また、コンテストに応募する前には、必ず企業・業界分析やテーマ分析を行っており、その過程で実際に行われているＳＤＧｓに対する具体的な取組例などを目にする機会が増えたことも、生徒たちがＳＤＧｓを意識するきっかけになったと考える。

（４）３年間の成果

本講座の集大成であるキャリア甲子園２０２１への書類審査応募終了後、生徒たちに本講座での取り組みを振り返るレポートを提出させた。その際、［ＳＤＧｓを意識した場面］という項目を設定してみたところ、ほとんどの生徒がＳＤＧｓを意識することが多かったと振り返っている。また、特別に意識をしていたわけではないが、振り返ってみるとＳＤＧｓの何かしらのターゲットの解決に繋がる企画を考えていたことに気がついたという生徒も複数みられた。これは、本校での３年間のＳＤＧｓ学習の成果といえるのではないだろうか。

	振返りレポート［ＳＤＧｓを意識した場面］
気づいたらＳＤＧｓ	私はプランとＳＤＧｓの繋げようということはそこまで意識しなかったが、私の考えたプランは自然とＳＤＧｓと関連していることに気づきました。
	知らず知らずのうちにＳＤＧｓを絡めたプランを考えていたりしたので３年間山商でＳＤＧｓを学んだ成果が出せたかなと感じました。
	ＳＤＧｓを深く意識していた訳では無かったが結果的に結びつくことが多かった。このように無意識にＳＤＧｓが出てくるのは、山商で３年間でＳＤＧｓについて深く学んできたからだと思う。今後地球を守っていかないといけない世代の私たちなのでこの高校３年間で学んだことはとても意味のある事だと思う。ビジネスプランを通してこのことにも気づけた。
	正直、プランを考えるのに精一杯であまり意識的にＳＤＧｓを考えたことは少なかったように思います。でも後から振り返ってみて、意識したつもりはないけど考えてみたらこれってＳＤＧｓに関連してない！？と思う点がいくつかありました。今までのＳＤＧｓ学習のおかげで意識的に考えなくてもプランを考える中で自然とＳＤＧｓを考えられるようになっていたのかも知れません。
改めて学び考えた	プランにつくるときに日本のペットボトルの生産量が２５０億本以上と知ってすごく驚きました。全部は減らせないけど少しでも減らすことによって二酸化炭素の量も減らせるのではないかと思いました。わたしもこれから水筒をもって、あまりペットボトルを買わないように努力していきたいと思いました。
	このままこの目標が達成されなければ地球に住めなくなるということを知り、こんな考えでいたら楽しい生活も無くなると思い、まずは身近なところから環境に優しいことをしていくようにした。エコバックを使用し家電製品など節電し、簡単なことからしていくことが大事だと気づいた。小さなことの積み重ねで大きな課題を乗り越えることが今の若い人には大事だとこの授業で気づくことができた。
	ＳＤＧｓの１６９のターゲットのひとつに「２０３０年までに人々があらゆる場所において、持続可能な開発及び自然と調和したライフスタイルに関する情報と意識を持つようにする」という内容があるが、今考えると私がビジネスプランの中で一番に考えていたＳＤＧｓはまさにこれのことであり、私はこのターゲット一つ達成するだけで他の「気候変動に具体的な対策を」や「陸の豊かさを守ろう」などの分野まで解決につながると信じています。
	僕の考えているＳＤＧｓは、全てのものの原点とも言える土を増やすことが最終目標だと思っている。しかし、僕が直接土を増やすことは困難なことだと思っているので、僕にできることはシャンプーを詰め替えにするとか、ご飯を残さず食べるとかその辺だ。そんな僕が、ビジコンにおいて意識していたことはいわば節約をしていたんだと思う。
実際に行動した	正直３年間の山商生活で１番ＳＤＧｓを意識した授業でした。何を考えるのにも必ずＳＤＧｓを意識しなければならず、それが当たり前に感じるようになってきました。普段の生活でもＳＤＧｓを意識して生活するようになって、ゴミをなるべく出さないようにしたり、水やガス、電気などの無駄遣いもなくなってきました。
	日本のプラスチックの排出量が他の国と比べてとても多いことを学びました。ペットボトルの消費が多いことが影響しているそうです。このことを知ってから学校に水筒を持っていくようになったり、レジ袋を貰わないでいいようにマイバックを持っていくようになったりしました。またあるお店ではストローが紙で作られているものを見たことがありました。このような時にもＳＤＧｓを強く感じた場面でした。
	３年生になり課題研究でＳＤＧｓと深く関わりを持つようになり、普段の生活でＳＤＧｓを意識するようになりました。エシカル消費を意識するようになりました。また食だけでなく、水・電気を無駄にしないように節約できるところは節約する、家庭でも男女平等の意識を育む、学校やネットで得た知識を家族に伝えるということをしました。この１年間でわたしも家族もＳＤＧｓに深く関わり、全てではないですが、いくつかの目標に取り組みました。続けることに意味があると思うので、自分自身の行動が未来を変える、という気持ちでこれからも取り組みたいと思います。
	ＳＤＧｓをビジネスプランに入れていくことで持続可能な社会にしていくために自分たちには何ができるのだろうかと調べてみたり、ビジネスプランを作ってみて何かＳＤＧｓにつながることはないのかと考えてみたりすることが増えたと思います。そのため、これからもＳＤＧｓを意識して取り組んでいきたいと思っています。

表９．生徒の振返りレポート　項目［ＳＤＧｓを意識した場面］一部抜粋

（５）今後の課題

３年間の取り組みの結果、生徒たちへの意識付けとしては大きな成果があったが、現状はまだ『学び・気づき・意識の変化』に留まっていると考える。実際にＳＤＧｓ１７の目標達成に向けた行動を、どれだけの生徒が実践に移すことができたかという点については、成果はそれほど上がっていないのではないだろうか。上記（４）のレポートの項目について『実際に行動した』という記入があったのは２５人中、表９に取り上げた４人だけであった。

この課題を解決するために本講座としてできることは、学校全体でＳＤＧｓを実践する企画を考え、本講座から学校へ提案することだと考える。さらに、他の講座とも連携して企画の実現を目指すという取り組みを行っていくことができれば、より魅力的な探究活動ができるのではないだろうか。

４　課題研究「日本経済学」

（１）　はじめに

日経ストックリーグへの参加も今年度で５年目となった。レポートの作成に入る前に、ＳＤＧｓのそれぞれの目標に対し、どのような取り組みを企業は行っているのかを幅広く調べることから始めた。調べていく中で、身近な企業でも自分たちの知らなかった取り組みがなされていることや、多くの企業がＳＤＧｓの取り組みを行っていることに気づきがあった。また、それぞれの目標に対しては、今までにＳＤＧｓ研修を受けていることからスムーズに調べていくことができていた。

中・高・大学生のための金融・経済学習コンテスト

日経 STOCKリーグ

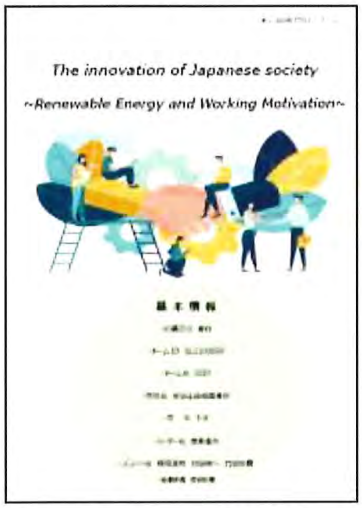
学習教材無料提供 / 最優秀賞チームを海外研修旅行にご招待！
日経STOCKリーグは、中・高・大学生を対象にした金融・経済学習コンテストです。参加学生は経済や株式投資について勉強しながら、企業を知り、社会を見る目を養うことができます。

（２）　投資テーマの決定

個人でＳＤＧｓの目標に対して取り組んでいる企業を調べ、その調べた企業の中から、投資してみたい企業を選定した。７名と少ない人数の中、投資してみたい企業が似ているチームで２チームに分かれた。各チームは、投資テーマについて、個人のテーマからチームのテ

ーマへ話し合いの中で決めていった。

１チーム目は、「労働者への待遇について」と「地域温暖化問題の解決に向けた脱炭素社会の形成について」のそれぞれを取り組んでいる企業を挙げて、２チーム目は、「生態環境の破壊について」と「脱炭素社会の実現について」のそれぞれを取り組んでいる企業を挙げ調べていった。



《１班：ＤＩＳＹ》

《２班：スーパー２軍》

（３）　生徒の取り組みの様子

日経ストックリーグの参加は初めてで初めは試行錯誤していたが、少しずつ株のこと理解し、ＳＤＧｓの取り組みを行っている企業に関心を持ち熱心に取り組んでいた。また、各チームで投資する企業を財務指標を用いて基準を決め、スクリーニングを行った。またそれだけでなく、ＳＤＧｓの目標に対しての基準も設定し、どの企業に投資するかを絞っていった。

《１班：ＤＩＳＹ》

《２班：スーパー２軍》

（４）　学習の成果とまとめ

コロナウイルス感染拡大防止による休校で授業が途中からオンラインで行わなくてはならない時があった。ＧｏｏｇｌｅＣｌａｓｓｒｏｏｍのＭＥＥＴ機能を使い、チームで意見交流をし、Ｇｏｏｇｌｅドライブに学校で作成していたデータをアップロードし、直接会えないながらも生徒は試行錯誤しながらレポートの作成に取り組んでいた。この期間があったため、オンラインでの取材等も計画していたが、行うことができなかった。

しかし、授業で株を購入する体験ができたことで、今まで気にしていなかった株価の動きを確認したり、株価の変動の背景を考えることで経済の変化に気づいたり様々な面から学びがあったと感じる。

（５）　今後の課題

日経ストックリーグを通して、直接取材を行うことはできなかったが、身近な企業がどのようにＳＤＧｓの取り組みを行っているのかを知る大きなきっかけとなった。また、それと

同時に、株式に触れ株価の変動をみることで、背景にどのようなことが起こっているのかを考えることができた。しかし、大手企業に偏りのでたチームもあった。地元の企業についての取り組みに触れ、オンラインなどを活用し、企業との取材を通して学びを深める活動にしていきたい。

5　地域課題の解決を目指す探究型アクティブラーニング授業の実践
～オープンデータを活用して地域の課題解決を目指す取組～

（１）　はじめに

本校では、平成２９年度から情報処理科の３年生２単位の選択科目「ビジネス情報管理」において、伊勢市が公開しているオープンデータを活用した取組を行っている。情報処理科は、「情報処理の知識を基にビジネス社会で活躍する人材の育成」を学科目標と掲げているが、全国でもトップクラスに値する経済産業省情報処理国家試験の合格実績がありながらも、その知識や技術を生かした取組が出来ていなかった。そこで、授業や国家資格取得挑戦で養った知識や技術を生かし、地域課題の解決を目指した取組を行うこととなり、地元企業や行政、専門学校等と協力した取組を行ってきた。

過去４年間は、伊勢市のゴミ問題、伊勢市の観光地や特産品、食品ロス問題、食文化紹介 HP 制作、防災クイズアプリ制作などに取り組み、今年度は 25 名の生徒が以下に説明する地域課題の解決に取り組んだ。

（２）　2021 年度の取り組み

【１学期】

地元である伊勢市をテーマとして、伊勢市の魅力を考える取り組みから始まった。伊勢市の魅力を探究しつつ、その魅力がちゃんと発信できているのか、どうしたらもっと伝わるのかなどワークショップを重ねた。探究を進める中で生徒が抱く疑問や改善点などをＫＪ法を用いて生徒が共有できる環境で視覚的に表現した。そこから、カテゴリーに分けて活動するグループを作り生徒たちが考えた８つの地域課題に沿って活動を行った。

今年度も伊勢市に協力を依頼し、生徒が考えた地域課題(「食品ロス」･「観光」･「交通」･「少子高齢化」･「海洋ごみ」･「貧困」･「空き家」･「二酸化炭素」）に関連する事業部署の担当者１７名が来校し各グループに分かれてワークショップを行った。生徒は実際の現場での取り組みを具体的に聞くことが出来、自分たちの企画を考える材料となった。

No	テーマ	担当部署
1	食品ロス	ごみ減量課
2	観光	観光振興課
3	交通	交通政策課
4	少子高齢化（労働力減少）	商工労政課
5	海洋ごみ	環境課
		ごみ減量課
6	海洋とSDGs・環境	子育て支援課
		福祉生涯学習センター
		保健課
7	国勢調査を活用した市の魅力向上（空き家活用、高齢者の住みやすい家）	企画調整課
		福祉生涯学習センター
		住宅政策課
8	CO2削減	環境課
		交通政策課

【２学期】

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて約１か月間のオンライン授業となった。コロナ禍において整備が進み、教員や生徒のスキルも向上したことで、この期間は「GoogleClassroom」や「Meet」、「Jamboard」といったオンラインツールを活用して、テーマごとに作業を進め、学校が再開しても作業が遅れることの無いように取り組んだ。

９月末には、分散登校も始まりいよいよ１０月からは本格的に学校が再開され、オンライン授業期間の影響が心配もあったが、その期間にもしっかりと取り組みことが出来たため、例年の進捗度に大きな遅れもなく授業の再開となった。

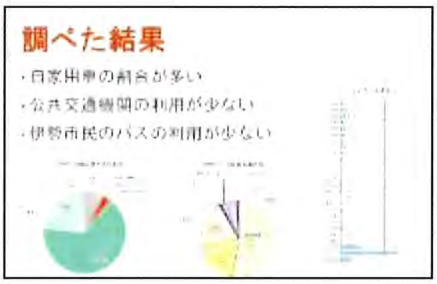
各グループが、伊勢市の担当部署へ再度意見の聞き取りを行ったり、アプリの開発に向けた技術協力を名古屋工学院専門学校への依頼を順次行い作業を進め、１１月に伊勢市役所の担当課を対象とした「中間発表」をオンライン形式で実施し、意見を受けるなど発表の改善に取り組んだ。３学期は、伊勢市長への発表準備となった。

（３）　発表内容

１班　交通

【目的】

日本有数の観光地として有名な三重県伊勢市では市の問題点として交通の不便がある。原因は、観光の際に自家用車を利用する人が多いことによる渋滞であり、その解決には公共交通機関を利用しやすくするために観光客向けのＷｅｂページを作成することで、渋滞緩和につながり観光客と市民がスムーズな移動を実現することを目的とする。



【内容】

理想とする交通状況は、観光客と地域住民が不便なく移動できること、公共交通機関の待ち時間を無駄なく利用できることである。そこには観光客が自家用車で移動することで、地域住民と観光客が快適に移動できないという現状や、既存の公共交通機関は待ち時間が長く不効率であることの課題がある。この課題を解決するために、観光客には公共交通機関を積極的に利用してもらうことで、自家用車での移動を減らし、渋滞の緩和に繋げる必要がある。また、駅やバス停近くにある食事処やカフェを紹介し、観光客が待ち時間を有効活用できる仕組みを作る。これにより、伊勢市民と観光客の満足度が上昇するだけでなく地域の飲食店や公共交通機関の利用率の向上だけでなく、自家用車の利用が減り排気ガスの削減につながると考えた。具体的には、Ｗｅｂページを作成し観光スポットを公共交通機関を利用して訪れる経路やバス停や駅付近の食事処やカフェを紹介し観光に訪れた人が時間を有効に利用できるようにする。

２班　観光について

【目的】

観光業界の現状を分析すると、コロナウイルスの影響によって全国的に観光業界では大きな打撃を受けていることが分かった。また、伊勢には伊勢神宮などの有名な観光施設があるが、それ以外の観光地に訪れる人は少なく、日帰り観光客が多く平均滞在時間が短かったりする傾向にあることが分かった。

そこで、県内在住者をターゲットとし、地元の再発見から観光業を活性化につなげることを目的とする。

【内容】

伊勢の観光地を舞台としたスタンプラリーを実施。紙の準備や、集計などが複雑なため、ＷＥＢページを使ったものとする。また、観光地近くの商業施設に協力依頼し割引サービスを得点とする。これにより集客効果が見込まれると考える。伊勢の特産品を景品とした抽選会にを企画し、観光地で受けたスタンプの数に応じて応募できるようにする。

スタンプの設置場所は、伊勢神宮、猿田彦神社、旧慶光館、二見興玉神社などの寺院系統から、伊勢シーパラダイス、賓日館、伊勢忍者キングダム、伊勢川崎商人館などのレジャー施設を選定する。

スタンプラリーはアプリではなくＷＥＢページから、ＱＲコードをスマートフォンで読み込むことでＷＥＢページ上のスタンプカードにスタンプが押される仕組みとなり、スタンプ協力店や割引サービス協力店は一覧だけでなく、おすすめや概要、アクセス方法なども掲載する。

デジタルスタンプラリーの開発には、名古屋工学院専門学校に協力を依頼し、考えた仕様を伝え何度もやり取りを重ねて完成に至った。スタンプには伊勢市のキャラクターであるはなてらすちゃんを採用することで伊勢市のアピールにもつなげる。

３班　海洋ごみ削減を目指して

【目的】

海洋ごみは環境破壊の促進だけでなく、産業の衰退や景観に悪影響をもたらすことで私たちの生活にも影響している。

例として、水産業の衰退が進むことで水産物の価格の上昇や、観光地が汚染されることによる観光客の減少などの問題が挙げられる。海に面している三重県では、このような問題から大きなダメージを受けやすいと考えた。

海洋ごみを削減することは【SDGｓ14 海の豊かさを守ろう】に繋がることから、地元である三重県の魅力の一つである豊かな海の持続を目指し、上記で示した問題を少しでも解決するために、海洋ごみ削減のための活動に取り組んでいきたいと考えた。そこで、Ｗｅｂページを作成し、Ｗｅｂサイトでは、海岸や海辺に漂着するごみの清掃活動の参加を呼びかけたり、海洋ごみがもたらす私たちの生活への影響について理解してもらい、より多くの人に海洋ごみについて関心を深めてもらうことを目的とする。

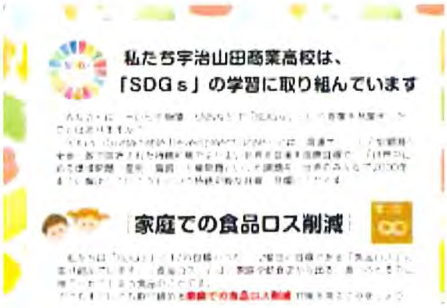
【内容】

海岸の清掃活動に参加し、自らの目で海洋ごみの現状について理解し、海洋ごみの削減活動を行っている地域団体の参加者に、海洋ごみ現状や影響などの知識と地域活動のあり方について学び、そこで得た知識や経験を活かして、多くの人の関心を得られるようなＷｅｂサイトの制作。海の再生を意味する「ＢＬＵＥ　ＲＥＣＯＶＥＲＹ　ＩＮ　ＭＩＥ」を標語としてサイト内では、県内の清掃活動についての詳細や参加の呼びかけ、活動報告を掲載する。

４班　食品ロス

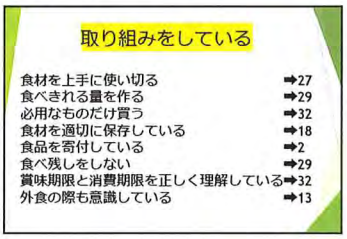
【目的】

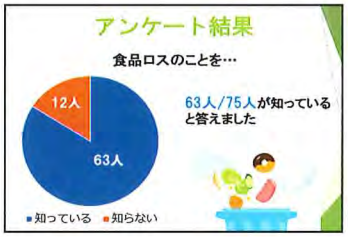
日本の食品ロス（本来食べられるにもかかわらず廃棄されている食品）は年間 600 万ｔになる。年間 600 万ｔとは、日本人がお茶碗１杯分のご飯を毎日捨てていることになる。食品ロスの問題解決はＳＤＧｓの２番「飢餓をゼロに」と１２番「作る責任使う責任」の目標につながる。伊勢市の食品ロスの現状や課題を高校生ならではの視点で発信し、少しでも食品ロスを減らすことを目標とする。



【内容】

食品ロスは、各家庭から発生する食品ロスを家庭系食品ロス、企業や飲食店などで発生する食品ロスを事業系食品ロスといい、今回の取り組みは自分たちの身近にある家庭系食品ロスに注目し、昨年度にも協力があった地元伊勢市清掃課と連携し、スーパーの惣菜売り場などで割引シールが張られた賞味期限が近い商品の廃棄処分を軽減するために、「すぐ食べるならつれって！キャンペーン」の広報活動を行った。この活動は、割引シールの張られた商品の購入に抵抗感のある消費者も、価値観の変化を促すことで抵抗感を除くことができる。キャンペーンを紹介するとともに、スーパーに協力を依頼して、店頭での消費者アンケートを実施し、得られた結果を分析することで現状を把握することにも挑戦した。食品ロスの認知度は高いが、実際に自らの取り組みとしては、なかなか出来ていないことが分かった。効果的な食品ロス対策をみんなで考える機会を増やしていくことも必要と感じた。





【感想】

この活動をとおして、特に食材を上手に使い切る、食べきれる量を作る、必要なものだけ買うと意識している人が私たち、想像していた以上に多かったことです。しかし「残してはいけない」と分かっていても、お腹がいっぱいで残してしまう、腐らせてしまいうという意見があり、そこをどう改善していくかがまた１つの課題だと思いました。もったいないだけで終わらすのではなくより多くの人が興味をもってもらい、高校生ならではの視点で多くのことを見つけて発信していきたいと思いました。

５班　貧困問題

【目的】

「子どもの貧困問題」この問題は日本でも世界でも共通している問題の一つであり、私たち自身も子どもだからこそ同じ目線で解決策を模索したいと考え「子どもの貧困問題」に取り組むこととした。

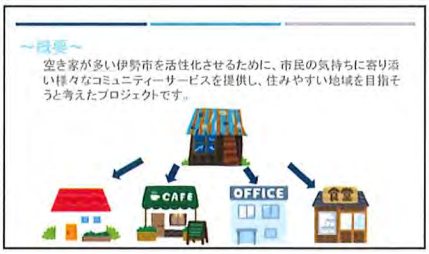
【内容】

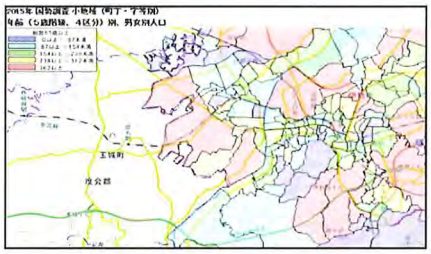
貧困問題には教育面で子どもたちが勉強を受けられる道具が揃っていないなどの問題が挙げられる。つまり貧困による教育格差をなくし、平等に受けさせたい、また受けられる環境を作る手助けをしたいと思いお金ではなく、モノを寄付してもらうという形で貧困で悩む子どもたちに少しでも希望や夢を持ってもらうきっかけとなるようこの取り組みを進めていこうと考えた。

６班　伊勢の空き家使っちゃおうプロジェクト

【目的】

空き家が多い伊勢市（空家件数 2,513 件）を活性化させるために、市民の気持ちに寄り添い様々なコミュニティーサービスを提供し、住みやすい地域を目指そうと考えたプロジェクトです。高校生の目線で空家の活用方法を考え、ターゲットに合った場を提供することで、空家を減らす。また、それを利用することで町の需要を高め、楽しい！暮らしやすい！伊勢市を目指す。





【内容】

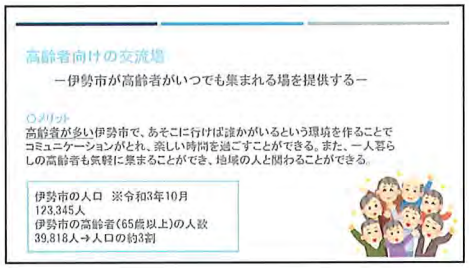
空き家の利用者は伊勢市に住んでいる、若者から高齢者、観光客、地方から帰ってくる人、地方からの学生、事業主や企業などに対して、空家を活用しターゲットに合った場を提供することで空き家を

活用する。

また、その場を利用することで町の需要を高め、楽しい、暮らしやすいと思えるような伊勢市を創造する。

考えられる空家の活用方法は、古民家カフェ、民泊、ゲストハウス、借家、寮、シェアハウス、シェアオフィス、高齢者向けの交流場などが挙げられるが、

今回提案する活用方法は、ターゲットを高齢者と若者に絞り、高齢者向けの交流場に注目した。伊勢市で取り組んでいる空家バンク制度を利用し空き家を伊勢市が確保、高齢者がいつでも集まれる場を提供することで、「あそこに行けば誰かがいる」という環境が出来、コミュニケーションがとれ、楽しい時間を過ごすことができる。また一人暮らしの高齢者でも気軽に集まれることで地域の人との関わりも出来る。集まりやすさを考え、既存のコミュニティバスやおかげバス環状線のバス停付近に交流場を設置することで利用者が行き来しやすくすることも考える。



【感想】

私たちはこの授業の活動を通して、伊勢市の課題点に取り組んだことで、課題を見つける力、自分たちが見つけた課題の解決に向けて考える力が身に付き、広い視野で様々なことを捉えることが出来るようになったと思います。

これからの進学先でも、社会に出てからでも課題解決力や広い視野で物事を見る力など身につけた力を生かして地域や地元に貢献できるように活用していきたいです。

7班　少子高齢化

【目的】

社会問題である少子高齢化について、内閣府が2019年度に発表した『高齢化の推移と将来推計』からすると、65歳から74歳と75歳以上の総人口に対する割合は年々上昇傾向にある。これは、労働力供給の減少や現役世代の負担の増大など経済的・社会的影響を私たちの将来の生活に与えることになる。少子高齢化は、価値観の多様化による未婚率の上昇や女性の社会進出による平均初婚年齢の上昇、結婚から出産までの年数の増加等が考えられるため、少子高齢化問題について高校生の視点で解決策を考え、カップルを応援したり出会いを後押しすることを目的とする。

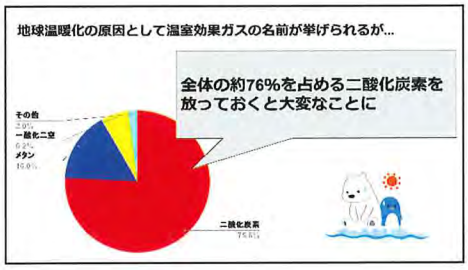
【内容】

伊勢・鳥羽・志摩に存在する恋人と訪れたいデートスポットを写真に紹介文を添えることで有名所から穴場までまとめ紹介する。取り上げた若者向けのデートスポットを写真とともに報告書にまとめ伊勢市役所に提出し、伊勢出会い支援センターで利用してもらうことを考えている。周知の方法についてもターゲットとする年齢層が活用するＳＮＳに発信することで周知出来ると考える。

8班　二酸化炭素

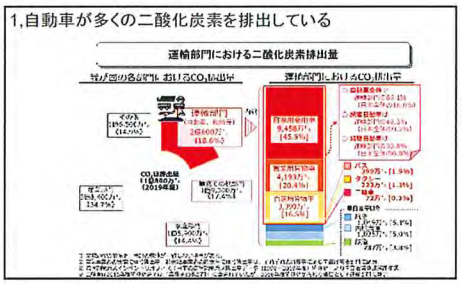
【目的】

二酸化炭素削減に向けた取り組みが各国各地域で進む現在、地元伊勢市の取り組みを研究し高校生の目線で地域に貢献できることが何なのか。また、伊勢市で新たに取り組むことが出来るものを高校生の柔軟な考え方で二酸化炭素の削減に向けた企画を考え、現在伊勢市の取り組む「伊勢市地球温暖化防止実行計画」において、市役所の事務



事業と市域における温室効果ガスの排出抑制の目標達成に貢献することを目的とする。

【内容】



二酸化炭素排出量を分析すると、自動車からの排出が最も多いことが分かる。高校を卒業後には自動車を購入し利用する人が多いことから、自動車購入時に二酸化炭素を排出しない電気自動車（ＥＶ車）を選ぶ人が増えれば、必然的に二酸化炭素が削減されることにつながるのではないかと考え、啓発するための動画を作成することとした。また、伊勢市で利用する公用車のＥＶ車化や、通勤でＥＶ車を利用する人へのサポートを目的とした充電設備の強化。通勤で利用する職員には、充電施設を自由に利用できるようにし、通勤手当を削減することも計画に含んだ。

（４）　伊勢市長への報告会

2022 年 1 月 24 日（月）本校において伊勢市のオープンデータを活用し地域課題を解決するために取り組んだ 1 年間の成果を、伊勢市長をはじめ、生徒の取組に協力をいただいた多くの関係者の方への成果報告会を実施した。発表会直前のコロナウイルス感染拡大の影響により、参加者はすべてオンライン形式での参加となった。

今年度は８グループの報告となり、画面を通して生徒は伊勢市の地域課題を課題解決するためにプレゼンテーションを行った。

報告会も今年で５年目となり、昨年に引き続きアプリ制作に協力してくれた名古屋工学院専門学校の関係者もオンラインで参加した。作成してくれた学生からは、デジタルスタンプラリーの企画に対して、依頼を形に変えるために相手の考えを理解することの大切さを学べたと話し、生徒も伝えることの難しさを知れた取り組みとなったことが、今後に活きる学びとなったように感じた。

（５）　おわりに

伊勢市をはじめ多くの関係者に協力をいただき、今年度も無事報告会の開催まで行えたことに感謝する。今年度も、昨年度から続く新型コロナウイルス感染症の影響が大きく、生徒の活動時間や範囲は制限されたが、その中でも、長期休業中を利用して伊勢市役所を訪問し話を聞くなど、積極的に生徒が行動したことで、昨年度の取組内容にも劣らないものとなった。生徒たちの取組内容は「食品ロス」や「二酸化炭素削減」といった世界規模の社会問題から、「観光」を取り上げた地域産業の活性化、「少子高齢化」や「空き家問題」といった地域課題への取り組みなど幅広く取り組むことが出来た。行政や企業そして地域と連携し、課題解決に向けて交渉や打ち合わせを繰り返し、現状を確認・把握するために現地視察やアンケートの実施など、しっかりと課題と向き合うことで、課題設定や解決能力を学ぶことができた。グループでの活動が中心となるため、効率的な作業に必要なコミュニケーションの取り方やそれぞれの役割分担による社会性の向上にもつながった。

学習を通して、多くの事を学び、自らの考えを形に変え、相手に適切に伝え、体験をとおして大きく成長する姿をうかがえた。

今年度の取組を活かし、来年度は地域との連携を強化し、地元伊勢市に貢献できる取組を引き続き行っていきたいと考える。

第３節　ＳＤＧｓ語学力向上プログラム

１　グローバル・コミュニケーションＡ

（１）開設理由と目標

ア　開設理由

令和元年度から文部科学省事業「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）」の指定校となり、持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダーを育成することを目指し、語学力の育成にさらに力を入れていく必要がある。

そのために、商業科及び情報処理科には「グローバル・コミュニケーションＡ」を開設し、これまでの書くことと話すことを主眼に置いた授業内容をさらに深化させ、ＳＤＧｓについて学び、その観点から英語でまとまった文章を書いたりディスカッションしたりする能力を身に着ける。

イ　目標

商業科・情報処理科の１年生を対象に、日常の様々な場面・話題に加えＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の観点に基づき自らが考えた意見等について英語で書いたり話したりする際の基本的な表現を修得し、それをコミュニケーションに活用する基礎的能力を養う。また、様々な場面・話題に触れることによって、文化の違いについても理解を深めようとする態度を育てる。

（２）　授業の様子

商業科１年生の「グローバル・コミュニケーションＡ」の授業では、単元ごとに基本的な文法事項を習得し、それを活用してリスニングやリーディング、さらにはスピーキングやライティングのコミュニケーション活動へと発展させた。その中で、特にＳＤＧｓに関わる内容に触れる際には、内容を掘り下げて課題に着目し、それぞれの考えを共有し、意見交換を行った。例えば、１学期の『校則』についての単元においては、英語で自校の校則を説明するにとどまらず、他国の教育や校則について調査し、日本との類似点や相違点等についてグループで共有し、意見を交わした。また２学期より本校にフィリピンからの留学生を迎える予定があったため、フィリピンの教育や校則等についても学習した。そして、１学期のスピーキングテストでは、「夏休み明けにやってくる留学生のために校則を説明しよう」という課題に取り組み、生徒たちは自文化と他文化の違いを踏まえながら熱心に伝えていた。

また、授業の初めには Today's phrase として、日常よく使われる英語表現について学び、その表現に派生する国際的な問題についても触れ、意見を述べ合う活動を行った。例えば、“Don't judge the book by its cover.”「人を見た目で判断してはいけない」という表現を学習した際には、アメリカでこれまでに起こった様々な人種差別問題に触れ、人種差別の起こる原因や偏見をなくすためにできることは何かなど考え、グループごとに発表し、生徒たちはそれぞれの意見によく耳を傾けていた。

（３）　成果と課題

商業科１年生の「グローバル・コミュニケーションＡ」においては、世界共通のコミュニケーションのツールである英語を使って、物事を理解し、自分の考えや想いを伝えることの大切さを知ってもらうこと、そして世界情勢や他国の抱える課題に向き合うことを意識して日々の授業を行ってきた。生徒たちは大変意欲的であり、自分の意見を他の生徒と共有することや発表することに毎回前向きに取り組んだ。

より多くの課題について提示し、考えを深め、意見を持つ機会を増やすことが今後求められる。また、その意見を伝えるために必要な英語表現や文法事項などの定着をより高めることで、伝えたいことを十分に伝えられ、自信やさらなるモチベーションにつながると考える。

２　グローバル・コミュニケーションＢ

（１）　開設理由と目標

ア　開設理由

令和元年度から文部科学省事業「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）」の指定校となり、持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダーを育成することを目指し、語学力の育成にさらに力を入れていく必要がある。

そのために、国際科には「グローバル・コミュニケーションＢ」を開設し、これまでの書くことと話すことを主眼に置いた授業内容をさらに深化させ、ＳＤＧｓについて学び、その観点から英語でまとまった文章を書いたりディスカッションしたりする能力を身に着ける。

イ　各学年の目標

（ａ）国際科１年生

国際科１年生においては、英語での基礎的発信力（話すこと［やり取り］、話すこと［発表］、書くこと）を身に着けることを目標とする。テーマについては、日常の様々な場面・話題に加え、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の理論や考え方を扱う。扱うテーマについて、ＳＤＧｓの観点を踏まえ自らが考えた意見等について英語で書いたり話したりする際の表現を修得し、それをコミュニケーションに活用する能力を養う。また、様々な場面や話題に触れることによって、文化の違いについても理解を深めようとする態度を育てる。

（ｂ）国際科２年生

国際科２年生においては、１年次のグローバル・コミュニケーションＢで身に着けたスキルをさらに発展させ、英語での標準的発信力（話すこと［やり取り］、話すこと［発表］、書くこと）を身に着けることを目標とする。テーマについては、日常の様々な場面・話題に加え、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の理論や考え方を扱う。扱うテーマについて、ＳＤＧｓの観点を踏まえ自らが考えた意見等について英語で書いたり話したりする際の表現を修得し、それをコミュニケーションに活用する能力を養う。また、様々な場面や多岐にわたる話題に触れることによって、文化の違いについても理解を深めようとする態度を育てる。

（ｃ）国際科３年生

国際科３年生においては、１・２年次のグローバル・コミュニケーションＢで身に着けたスキルをさらに発展させ、英語での発展的発信力（話すこと［やり取り］、話すこと［発表］、書くこと）を身に着け、場面に適した表現を使用できるようになることを目標とする。テーマについては、日常の様々な場面・話題に加え、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の理論や考え方を扱う。扱うテーマについて、ＳＤＧｓの観点を踏まえ自らが考えた意見等について英語で書いたり話したりする際の表現を修得し、それをコミュニケーションに活用する能力を養う。また、様々な場面や多岐にわたる時事的話題や社会問題に触れることによって、文化や考え方の違いについても理解を深めようとする態度を育てる。

（２）　授業の様子

国際科１年生の「グローバル・コミュニケーションＢ」の授業では、ライティングやスピーキングといった自分の意見を他者に伝える際に必要な基礎的な表現や文法事項を学習し、実際にペアワーク等で使用することで身につくように工夫した授業を展開した。特に１年次に基礎的な力をしっかりと育成しておくことが、２年次・３年次になったときの成長に繋がるため、より一人ひとりに行き届いた指導ができるようクラスを半分に分け、一クラス２０人以下にして授業を行なった。

国際科２年生の「グローバル・コミュニケーションＢ」の授業では、１学期にＳＤＧｓ１７の目標についてグループ・プレゼンテーションを実施した。クラスを生徒３名一組のグループに分け、ランダムに割り当てられたＳＤＧｓの１７の目標の一つについて

１．その目標の中身をしっかり調べ伝える

２．その目標解決に向けて我々ができることを提示する

という内容で行なった。各チームは英文で書かれた資料を読み込みながら、それぞれ割り当てられたＳＤＧｓの目標を理解することから初め、各自でプレゼンの内容を考え、基本的には英語で、聴衆が分からないような難解な英語表現を使用する際は日本語も使用しバイリンガルで行なった。

また、２学期にはグループ・ディスカッションを実施した。グループ・ディスカッションでは、司会者、発表者、時間係、筆記者にわかれ、それぞれの役割を全うしながら各自の意見を英語で伝え合うというもので、最初は難しく感じていた生徒も多かったが徐々にやり方にも慣れていき、最終的には自分たちのグループでの話し合いをとおして意見をまとめることもできるようになった。ディスカッションのテーマには、２学期は生徒に馴染

みのある「校則」等を扱ったが、３学期には少しハードルを上げ、ＳＤＧｓに関連した「環境」や「ジェンダー」を扱った。

国際科３年生の「グローバル・コミュニケーションＢ」の授業では、１学期にＳＤＧｓに関するテーマ学習を行った。４人組みで１０班を作り、班ごとにＳＤＧｓのゴールを一つ選び、日本及び世界における問題の具体例、データを収集・整理し、「問題解決のために社会は何をすべきか」と「高校生は問題解決のために何ができるか」をまとめ、Google スライドを用いて英語でプレゼンテーションを行った。２学期は教科書で扱われている若年層の選挙投票率の低下の問題について、若い人が政治や選挙に関心を持つようにするにはどうすればよいかを考え、ペアで話し合った。関連して、被選挙権年齢の引き下げやオンライン投票のメリット・デメリットについて自由に意見を述べ合うなど、様々なテーマについて賛成・反対の意見を述べ、英語で論理的に順序立てて理由を述べる練習を行った。

（３）　成果と課題

国際科の「グローバル・コミュニケーションＢ」においては、科目の目標に「英語での発信力（話すこと［やり取り］、話すこと［発表］、書くこと）を身に着け、場面に適した表現を使用できるようになること」、および「ＳＤＧｓの観点を踏まえ自らが考えた意見等について英語で書いたり話したりする際の表現を修得し、それをコミュニケーションに活用する能力を養う」ことを掲げ、日々の授業に取り組んできた。「英語表現Ⅰ・Ⅱ」の検定教科書を使用し、さまざまな表現方法を学びつつ、ＳＤＧｓの観点を取り入れプレゼンテーションやディスカッションを行えるようになってきたことは、非常にチャレンジングではあったが、生徒には大きな自信につながり一定の成果を上げることができた。また、この授業を通して生徒達は、「話すこと」及び「書くこと」において、ある程度まとまった量の英語を臆することなく発信することができるようになってきた。

今後の課題としては、量だけでなく、発信する英語の質的向上である。次年度からは新しい学習指導要領が実施され、１年次から外国語教科において「論理・表現Ⅰ」が開始される。今後、当文科省事業で開設した学校設定科目「グローバル・コミュニケーションＢ」において得たノウハウを活かし、生徒が場面に適した正しい文法や英語表現を使いつつ、より論理的に話を組み立てる能力を育成できるよう、「論理・表現Ⅰ」や「英語コミュニケーションⅠ」等の授業改善に取り組んでいきたい。

３　英語セミナー

（１）　目標

英語運用能力の向上をめざす活動の一環として、国際科の生徒を対象に学年別で英語セミナーを実施している。他校に配置されているＡＬＴを招聘し、様々な活動を英語で行なうことを通じて、積極的に「聞き」「話す」ことにより、英語の世界に慣れ、英語運用能力の向上を目指す。また、様々な国出身のＡＬＴとのふれあいを通じて、広く世界への関心を高め、国際感覚を身につける。

（２）　英語セミナーの様子

ア　国際科３年生英語セミナー

（ａ）日時及び場所

日時：２０２１年７月１０日（土）
　　９：３０～１５：３０
場所：本校　会議室

（ｂ）内容と様子

３年生を対象とした今回の英語セミナーは「Around the World」をテーマに、世界の文化、習慣、食べ物等をさまざまな活動を通して学ぶことができるよう工夫した。

本校生徒４人～５人につき１名の外国人指導助手を配置し、グループ対抗でクイズやスキットを行なった。使用言語は英語のみに限定し、１日英語漬けの生活をすることで、日頃の英語の授業で学んだ表現を実際のコミュニケーションとして活用する楽しさを実感することができた１日であった。３年生にとっては高校生活最後の英語セミナーということもあり、どの生徒も一つ一つのアクティビティに真剣かつ楽しそうに取り組んでいたのが印象的であった。

（グループ毎にさまざまな活動に取り組んでいる様子）

（セミナー後の全体写真）

（ｃ）生徒の声

・たくさんの ALT の先生と交流することができて良い経験になりました。全部英語で会話をしたので、自分の考えを英語で伝えるのが難しかったけれど、自分の英語が相手に伝わった時はとても嬉しかったし、楽しく会話をすることができて良かった。
・様々なゲームやクイズを通して楽しく英語に触れることができてとてもためになった。「楽しむ」というのが一番の目的のため、堅くなくやりやすかった。
・ALT と英語で楽しく学ぶことができ、国際交流の一環としてとても良い経験ができました。
・季節毎に合ったイベントを英語で楽しみながら、正しい文法、リスニング力を付けることができた。

イ　国際科２年生英語セミナー

（ａ）日時及び場所

日時：２０２１年１０月３０日（土）
　　９：３０～１５：３０
場所：本校　武道場

（ｂ）内容と様子

２年生を対象とした今回の英語セミナーは「Halloween」をテーマに、さまざまな活動を通して世界でハロウィーンがどのように行なわれているのかを学ぶことができるよう工夫した。本校生徒４人～５人につき１名の外国人指導助手を配置し、グループ対抗でクイズやスキットを行なった。使用言語を英語に限定していたので、試行錯誤しながら英語で自分の意見や気持ちを伝え合おうとする姿が見られた。日頃の英語の授業で学んだ表現を実際のコミュニケーションとして活用する楽しさを実感することができた１日であった。

（ｃ）生徒の声

・最初は１日ずっと英語で会話することに苦手意識があったし、自分の能力も低いので心配だったけど、同じグループの人に聞いたり、ALT の人にわかりやすく話してもらったりして、楽しむことができました。一日中ずっとゲームで、グループの人のことを知れたり、新しい英単語を知れてシンプルに楽しかったです。劇をしたときには、いつもなら前日から準備をしてセリフを覚えるけど、今回は当日に内容を決めて、当日に発表したので、緊張感はなく楽しんで発表できました。英語セミナーを通して自分の英語の能力に少し自信がつきました。良い経験ができて良かったです。
・セミナーが決まってから、ずっとずっと楽しみにしていたので、参加することができてとても嬉しかったです。自分はまだまだ英語力が無いので、言いたいことが伝わるのかどうかドキドキしました。表現が難しかったり、分からない単語が出てきたりしましたが、ジェスチャーを付けたり色々工夫して伝わるように頑張りました。先生方も優しくて、ミニゲームや劇など、全てが本当に本当に楽しかったです。あまり ALT の先生とお話をする機会もないので、本物の英語（発音や文の作り方）など一日中聞けてすごく良い経験になりました。また、このようなセミナーに参加したいです。
・自分は英語が得意な方ではなく、普段英語で会話をするときはとても緊張して自分の言いたいことを伝えられていませんでした。しかし、英語セミナーでは、一日中

英語という縛りの中、周りの友達をはじめ、様々なALTの方々ともうまく会話ができ、自分にとってとても良い経験になりました。また、英語セミナーを通して、英語を使って外国の方と話すことの楽しさを感じることができました。

・普段自校のALTとしかしっかり英語で話す機会が無いけど、何人も他校からALTが来てくれて話せて良かった。やっぱり自分の思っていることを伝えるのは難しかったけど、その分もっと英語を話せるようになりたいと思えることができた。これかれももっと英語のスキルを鍛えていきたいと思う。

（グループ毎にさまざまな活動に取り組んでいる様子）

（セミナー後の全体写真）

ウ　国際科１年生英語セミナー

１年国際科に在籍する生徒を対象にした英語セミナーを、２０２２年２月５日（土）に計画していた。しかしながら、全国的な新型コロナウイルス感染の第６波の影響をうけ、三重県も「まん延防止等重点措置」実施地域となった。

英語セミナーにおいては、生徒が小グループでメンバーとかなり近い距離でアクティビティを行なう必要があること、また、他校から複数のＡＬＴを招聘することを考えると、感染拡大防止の観点から自粛する方が賢明であると判断し、残念ながら中止することとした。

４　校内外の英語スピーチコンテスト等への参加

（１）　スピーチコンテスト

ア　三重県高等学校英語教育研究会主催英語スピーチコンテスト

（ａ）取組

この大会は、全国高等学校英語スピーチコンテストに繋がる予選を兼ねた大会で、この大会の上位入賞者２名が東海北陸ブロックに進出でき、その中の上位入賞者が全国大会にコマを進めることができる。本校は、主に全国商業高等学校協会主催のスピーチコンテストに出場してきたが、数年前から当大会にも挑戦し始めた。

この大会に出場を希望するＥＳＳ部の生徒４名が、夏休み前からスピーチの原稿作成に取り組み、何度も英語科教員やＡＬＴの指導を受け完成させていった。予選は、原稿と録音された音源で行なわれるため、発音指導、イントネーション指導等を頻繁に行なった結果、２名の生徒が本戦への出場を果たす事ができた。２名のうち、一名は３年生の生徒で、本戦の開かれる週の翌週に大学入試があるため、進路実現を優先させるため残念ながら本戦を辞退することになった。

本戦はレベルが高く、出場した１名は上位の入賞者６名に入ることは出来なかったが、出場した生徒には、さらに英語力を磨くモチベーションになりとても良い刺激になった。

（ｂ）本戦の様子

本戦は１０月９日（土）に三重県人権センター多目的ホールにて、昨年と同様無観客で開催され、引率者も出場者一名につき一名と限定されていた。また、発表者がスピーチをする演台には飛沫感染予防のためのビニールシートが取り付けられ、発表が終わる毎にマイクの消毒をしながら進められた。

本校から出場した生徒（２年生 小坂 晴南）は、練習してきた成果を十分発揮し、ジェスチャーや感情豊かな表情で堂々と発表していた。

（小坂晴南の発表の様子）

（ｃ）スピーチのスクリプト

２年５組 小坂 晴南

Toward a comfortable society for all people

What image do you have of disabled people? What do you feel when you see them? Maybe "pitiful" or "unfortunate" comes to mind. Normally we have pretty negative stereotypes towards people that are disabled. But maybe it's time to change our stereotype. Should they really be looked down on with pity?

When I was in elementary school, I had a friend who is mentally disabled. One day, his parents came to school and talked to us about him. They told us that they did not want others to feel that their son was pitiful or unfortunate. After I heard this from them, I came to think that he may not see himself as ill-fated or unhappy. It is us that came to the conclusion that disabled people lead a sorrowful life.

Actually, I have a relative who has a physical disability. She can't move her right arm or foot freely. I once went shopping with her before. I could feel the stares by other people. Maybe many people were feeling sympathy towards her and thought "oh, poor lady." Of course, there are some things that she cannot do due to her right arm and right foot, but it does not mean that she feels sad. She always says that she can do anything that anyone else can do and she is very satisfied with her life.

Why do we tend to have a negative stereotype about people with disabilities? That is because we are ignorant of their situation. We have to find the time to understand them better. "Inclusive education" may be a good solution. Inclusive education aims to contribute to the realization of a symbiotic society by having people with disabilities and able-bodied people learn together in school. The merit of this education system is that it allows both disabled children and children without disability to have opportunities to interact together to get to know each other more.

What I want to say the most is that we have to have some opportunities making it possible for disabled people and able bodied people to communicate in our day to day lives, such as at school or work. Having said that, it may not be that easy. However, there is something we can do. Three years ago, I went to an institution which was home to many disabled people, whom I interacted with. Before I went there, I had thought it was difficult to talk with disabled people. However, I talked with them and noticed that we can communicate with disabled people easily. I was able to realize that I was the one who was creating a barrier for disabled people. What I learned by going there is that exposure is the most effective way to remove barriers with disabled people. If we communicate with them, we can understand what life is like for disabled people. Also, we can understand the difficulties they experience.

By communicating with challenged people, we will be able to remove our stereotypes. Then, we will be able to live in a respective and comfortable world for both disabled and abled people. We are all children of this world and we are all different. If we all embrace our differences, we can live together in harmony with respect. Let's create a society where we all can express ourselves without hesitation!

３年５組 竹田 裕喜（大学受験準備のため予選通過したが本戦は辞退）

Be honest. Be yourself.

Have you ever played tag? Almost all of you will say YES. When you play tag, you must run away so as not to be caught. Then, in your daily life, have you ever run away from anything? In Japan, it is seen as an ideal behavior not to run away from things that we have committed to. Actually, almost all Japanese people know the proverb, "patience is a treasure in your life." We put every effort to stick to our current situation even if we don't like it. But is it really that beneficial for us not to run away?

Many Japanese believe that "running away equals proof of weakness." As I said, we, Japanese tend to think patience is golden. However, this virtue often hurts people.

If we put up with something too much, of course, we feel stressed. If it is only a one-time thing, it doesn't develop into a serious problem. However, most often this situation is repeated. In the worst case of scenario, this repetition causes some people to choose the option that nobody hopes; suicide. Suicide happens in a moment. People decide to die without anybody noticing the signs.

There is some data showing some results that are very characteristic of Japanese people. According to Pfizer Inc., three fourths of Japanese think "even if we get injured a little, we should act as if we had no pain and withstand it in order not to be noticed by other people." Such a result is only seen in Japan. Though it is the case of physical pain, the same can be true of psychological pain. A survey conducted by the Ministry of Health, Labor and Welfare states that Japanese suicide rate is 16.3%, which is much higher than any other developed country. Among Japanese people aged from 15 to 39, the number one cause of death is suicide. Actually, other G7 countries' results are completely different. It is clear that there is a close relationship between the high rate of suicide and Japanese way of thinking.

My best friend lost his father. He was a very kind person. When I was in nursery school, he did lots of things for me. He was a successful businessperson with a strong sense of responsibility. However, ironically, his kindness and sense of responsibility prevented him from running away. In his workplace, he was caught in a dilemma between his bosses and his team members. He didn't want to bother his company. He saw no option but to end his life unfortunately. From this experience, I learned one important thing, which is "it is OK for us to run away if it is necessary."

However, we always hesitate to run away because we tend to be afraid that everything, such as friendships, partnerships, and our future career, will be miserable if we run away. We shouldn't be worried about such things. Remember that there is something more important than anything else; the present. There is no future if you don't have the present. That is why we have to live now although the road is not always easy. I would like to give you one piece of advice. It is OK to run away. Let's start to be honest about our feelings.

イ　第３８回全商英語スピーチコンテスト三重県大会

（ａ）取組

当大会は、全国商業高等学校協会主催のスピーチコンテスト全国大会に繋がるもので、商業高等学校の生徒が出場する。当大会にはレシテーションの部（課題文の朗読）とスピーチの部（生徒自身が作成した原稿を使用したスピーチ）の二つのカテゴリーがあり、本校からはスピーチの部に３年５組の山本朝日が出場した。夏休み前から原稿作成に取りかかり、原稿が仕上がってからはＡＬＴや日本人教員に発音や抑揚の付け方の指導を受け練習を重ねた。

（ｂ）大会の様子

当初、三重県総合文化センターにて開催予定であったが、四日市商業高等学校に会場が変更されて行なわれた。新型コロナウイルス感染予防の観点から、審査員は来場しない形で行なわれた。出場者は指定された時間に会場に行き、その場で動画を撮影され、撮影された動画を、後日審査員が審査するという方法で行なわれた。山本は会場に到着後、すぐに撮影が始まる旨伝えられたが、本人は落ち着いて力を発揮し、堂々とスピーチをすることができた。これまでの練習の成果が実り、第２位に入賞することができた。

（ｃ）スピーチの内容

The importance of mental health

We can all agree that it is important to be healthy. If you have a broken arm, you'll go to the hospital of course. But what about our mental health? A study conducted by UNICEF revealed that Japan has the highest score in physical well-being, but it's the lowest in mental health. It is well known that some mental illness are associated with an increased risk of suicide. Then, you may not think this matters,

but did you know that one of the major causes of death amongst Japanese youths is suicide?

Last year, one of my favorite TV personalities died. When I heard the news that she ended her own life, I was shocked. She was a professional wrestler, so everybody thought that she was strong. However, her mentality was as fragile as a glass and she was mentally exhausted. She had been constantly bombarded with criticism and harsh comments over SNS. Nobody knew she was suffering so badly that she could no longer take it. I wondered why she wasn't able to reach out to someone for help.

We all get stressed sometimes. Don't you have days when you don't feel like going to school? I guess many young people do and it's no surprise, we're not mature enough to handle all these problems and worries school provides. Sometimes you might just need a break from school to relax and regain your energy. However, this is not so easy in Japan being absent from school is not tolerated well. But is it really that bad to be absent from school? Think about it. If you keep going to school against your will, with the feeling of anxiety, the stress may pile up and lead your mental health to suffer. If this carries on for too long with no outlet, in the worst case scenario, you may decide that ending your life is easier than continuing on with your problems.

Thus, I hope that we can learn and understand more about mental health, and get as much mental care as we do with physical. By creating a society where people can take a rest whenever they need, without being judged by others, Japan can become the best country both in physical and mental well-being. Endurance is surely important, but you must know your limits. Just remember that there's nothing more important than your life.

ウ　朝日大学主催 第３６回高等学校英語弁論大会

（ａ）取組

数年前から本校ＥＳＳ部の生徒が参加しはじめた英語弁論大会であるが、今年も１名の生徒が書類審査を通過し、本戦に出場することが出来た。

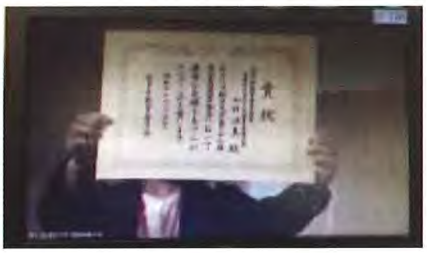
今年は全国４７の高校から９２名もの応募があり、書類審査を通過した２０名が本戦に出場した。例年であれば、朝日大学にて本戦が行なわれるのであるが、今年度は昨年度同様新型コロナウイルス感染拡大に伴い、出場者は全員動画を大学に送付し、オンラインでの大会となった。

（山村涼真のオンラインでの発表の様子）

本校から出場した生徒（３年生 山村 涼真）は、何度もスピーチの練習を英語科教員やＡＬＴと行い、動画を録音した。

（ｂ）弁論大会の様子

１１月２７日（土）にオンラインで開催され、発表順に発表者のスピーチ動画が流された。北は東北、南は沖縄の高校から参加者が集い、とてもレベルの高いスピーチコンテストであった。山村の発表動画は、発表順で最後の２０番目に流されたが、堂々とした姿勢で感情を込めてスピーチをしており、画面越しではあるが伝えたい内容をしっかりと聞き手に伝えることができていた。内容も本人の経験から伝えられるもので、聴衆の心に響くものであった。



結果発表もオンラインで行なわれたが、山村のスピーチの内容が審査員にも伝わり、岐阜県教育委員会賞（第４位に相当）を見事に受賞することができた。

（ｃ）スピーチの内容

３年５組 山村 涼真

Life savers

We are "Life savers!" I know what you are thinking. "What the heck are you saying?" I know where you are coming from. We are not the life savers who patrol in the swimming pool or doctors or nurses who save the lives of people.

However, believe it or not, we can save lives, and it's actually a lot simpler than you think. In the world, there are many people who do not want to live. Some people think it's easier for them to die rather than to suffer from their problems. According to statistics from the Ministry of Health, Labor and Welfare, last year, the number of suicides in Japan was about 20,000, and about half of them committed suicide due to health problems.

Meaning half of the people had nothing physically wrong with them. These people are normally lonely and isolated. How do we save these people? Even If we were doctors or nurses and had medical knowledge, we still may not be able to save them because those skills are completely useless against loneliness. However, there are ways to save them.

I define "Life savers" as people who use "words" to save sufferers and remind them that life's worth living. Moreover, you can engage in medical care as "Life savers" regardless of your job or your age. Their cure is really simple, communication. Just talking with people helps in so many ways.

In March, I went to Shima Community hospital as a volunteer for a week. Firstly, I took charge of one patient who needed an IV so she couldn't leave the hospital. Even worse, she often said "I rather die than not to go anywhere." Whenever I heard that line, I would say, "Please don't say that," but she would not listen.

Whilst volunteering, I looked around each department and learned how difficult it is to work at a hospital. But what I could do was talk with this patient without the training. It wasn't easy to communicate with her at first because she refused to talk with me.

Her stubbornness lasted three days. But on the fourth day, unexpectedly, she came and talked to me! She talked really happily about herself. But, why did she suddenly start talking to me, I thought. She told me "listening to you, I want to know and hear your story more. Talking to you has given me meaning." As I listened to her stories, I almost cried because until recently, someone who said they'd rather die looked so happy. Therefore, I realized that even if we are not a doctor, we are "Life savers!"

Now, because of the aging society, there are a lot of elderly people. According to statistics from the Ministry of Health, Labor and Welfare, over the last 3 years there were around 8,000 suicides among elderly people, accounting for about 40% of all suicides in any given year. I think that number will increase, so young people like us need to do something and step in as a "Life saver".

Everyone has the power to talk to others. No, we are not doctor, but we only need "words" to save our patients. There is a lot we can do to save people using the power of words. Yes, we are "Life savers!"

エ　校内英語スピーチコンテスト優秀者

<The time given to us>

Akari Sonobe

The corona virus has changed our life. We can't go to school or travel any more. It's getting harder to communicate with people now.

In the midst of that, I challenged language learning. As a result, I got able to speak Korean in three months. I had never studied abroad and I didn't have any Korean friends. This shows if you change your lifestyle, you can master a foreign language quickly.

When I was learning Korean, I did it in three ways. First, I always thought about what to say in Korean when I heard Japanese. Second, when I watched Korean Dramas, I turned off the captions. Third, when I talked to myself, I tried it in Korean.

Studying like this, I gradually became able to understand Korean news in Korean! For the first time, I knew they had different counter measures against the virus from those of Japan. For example, they are fined if they do anything against the rules.

You can understand the culture and the way of thinking of another country by studying their language. We might spend more time at home. I think making effective use of this time will change your life a lot. I can't speak as well as Korean people, but I'll study hard.

<A good listener and a good nodder>

Haruna Kosaka

Conversation. What impression do you have of this word? Do you love it? Fun? Don't like it? I think it's different from person to person.

I think most of us think that most of our problems and suffering in our daily lives are related to the fact that "we don't understand the feelings of others well." For example, we do things that make them uncomfortable without awareness, because we don't know how they feel. I used to predict other people's feelings by their facial expressions, words and actions. However, after I came across a book, I changed my mind! The book says that the best way to know people's feeling is to "listen carefully to what they say." If you try to understand their feelings, even if only a little, the person who listens to you will be happy to know that you have tried to understand his or her feelings. Then, misunderstandings are avoided and the distance between you is shortened, so the relationship will be improved too! Also, the book says that a good listener is a good nodder. Nodder means someone who nods. Nod strongly when you feel that "This is what the speaker wants the other person to understand." Nod with a sad face when the story is sad. You can make the conversation more interesting just by listening and nodding your head.

My conversations are often silent, and I was always worried that I had to say something. However, anyone can become a good conversationalist as long as you listen carefully to what others want to say. Why don't you become a good listener, also known as a good nodder, and expand your conversations more?

（２） 成果と課題

これまでの課題としては、社会的事象を扱い、その事象に当事者意識を持って取り組んでいることをアピールする力が足りなかった。このことを反省し、原稿を考える段階で充分に内容を練り、必ず自分自身の経験を入れることで社会的事象を自分の問題として捉えている姿勢を表せるように指導した。こういったことは確かにチャレンジングではあったが、スピーチコンテストに積極的に取り組むことで、まとまった英語の文章を論理的に書く能力や、ジェスチャーやアイコンタクトを含めた表現力の向上に繋げることが出来た。これらの成果が実り、三重県商業高等学校協会主催のスピーチコンテストや朝日大学英語スピーチコンテストで見事上位に入賞することができた。

今後もさらに聴衆の心に響くスピーチの作成と発表を通し、英語での自己表現の幅を広げられるよう指導してきたい。

第４節　伊勢志摩ＰＲプログラム

１　課題研究「観光とビジネス」

（１）はじめに

「観光とビジネス」講座は昨年度から開講され２年目となる。講座の目的は、ＳＤＧｓの理念に基づいた自然資源を生かしたグリーンツーリズムなどを利用し、地方創生を目指した取り組みを学ぶ。また、インバウンド観光に需要が高まっている現在に対応できる力を身につけることや従来型の観光でない地域の生活文化を体験するなど、地域住民と訪問者の交流が観光の多様化を生むこと、地域と訪問者を結ぶ存在として、必要とされる力を学ぶことを目的としている。

（２）内容

（ａ）観光甲子園エントリー

「観光甲子園」は高校生が創作する１８０秒観光動画のコンテストである。

＜年間の流れ＞

１．課題をみつけテーマを決める。

２．情報を収集し、話し合いを重ねる。

予選審査【「動画制作計画書」と「絵コンテ」または「事業計画書」と「未来レシピ」を提出し審査。２０チーム前後に絞られる。】

３．役割分担をして１８０秒動画を作成する。

準決勝審査【「作品応募シート」と「１８０秒動画」を提出し審査。５チームに絞られる】

４．動画作品の企画・調査から制作に至る過程を３００秒の動画にまとめる。

決　勝【グランプリ、準グランプリ決定】

今年度は、

・地元都道府県が有する日本遺産を世界に向けてＰＲする動画を作成する
「日本遺産部門」

・自分の町が舞台の修学旅行プランをＳＤＧｓ思考の体験型メニューで企画する
「ＳＤＧｓ修学旅行部門」

がテーマ設定され、本校は「日本遺産部門」に１チーム、「ＳＤＧｓ修学旅行部門」に４チームがエントリーした。

＜テーマ決めと情報集＞

それぞれのチームでテーマ決定し、

【日本遺産部門】は、

『海女(Ama) に出逢えるまち 鳥羽・志摩～素潜り漁に生きる女性たち～)』にテーマ決定

【ＳＤＧｓ修学旅行部門】は、

ａ.『おかげさまに触れる旅　～地産地消の本質、自然の恵みに感謝しよう～』
地産地消が身近にあることを気づく旅

ｂ．『CLOTHSupISE～伊勢神宮だけじゃない、三重の魅力～』
伝統工芸品の伊勢木綿の作成過程を見学

ｃ．『There is SDGs by you. ～あなたのすぐ近くにSDGsはある～』
志摩市でＳＤＧｓを探す旅

ｄ.『人と自然が織り成す結晶、真珠の神秘に迫る旅』
里海のまち、志摩市で学ぶ SDGs

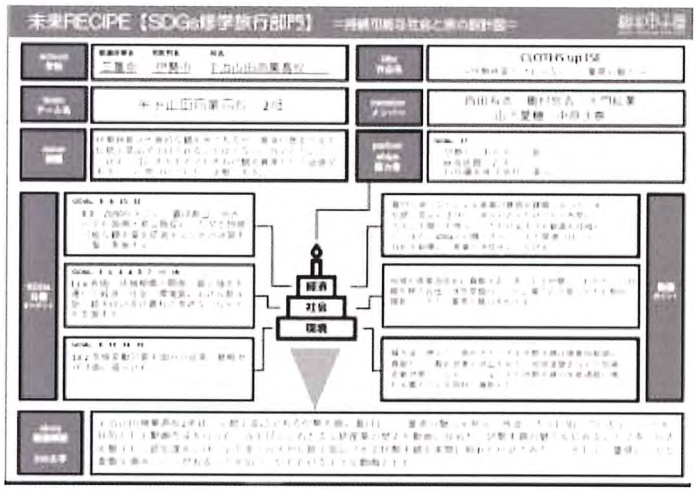
と、それぞれテーマを決め情報収集をおこなった。自分たちで、事業所とアポイントをとり取材をさせてもらい、生の声を大切に資料集めを行い、【日本遺産部門】は志摩が取り組むＳＤＧｓをまとめ「動画制作計画書」と動画のイメージ「絵コンテ」を作成。【ＳＤＧｓ修学旅行部門】は、ａ班は地産地消と食品ロスに着目し、ｂ班は伝統工芸品の伊勢木綿に、ｃ班は志摩地中海村のＳＤＧｓの取組みを、ｄ班は真珠を作るために、自然と人間が共存していくことが最も重要であることに着目し、それぞれ「事業計画書」と「未来レシピ」を作成した。

様々な地域課題とＳＤＧｓとの接点をもたせられるようにアプローチが必要となり、それぞれのキーワードとＳＤＧｓとの関わりを深く掘り下げられるようにすすめた。

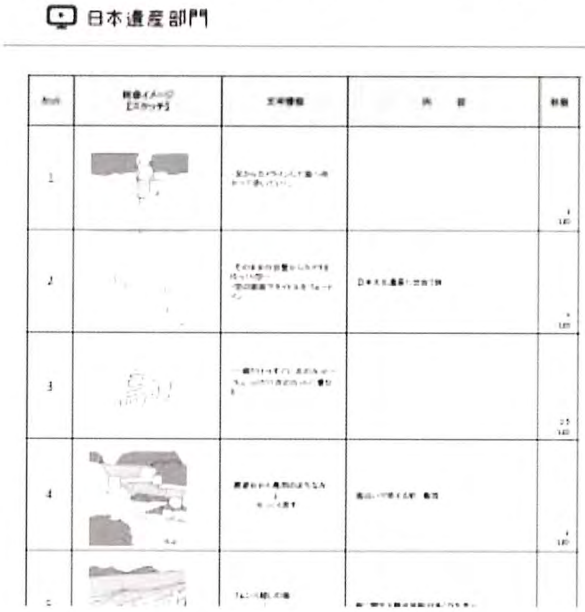
＜【ＳＤＧｓ修学旅行部門】未来レシピの例＞

観光甲子園では底辺から BIOSPHERE【生物（環境）圏】、SOCIETY【社会圏】、ECONOMY【経済圏】の３層で構成されるこのモデルをベースに、豊かな未来の設計図をつくる手法を未来レシピと名付けて動画企画の設計を行う。

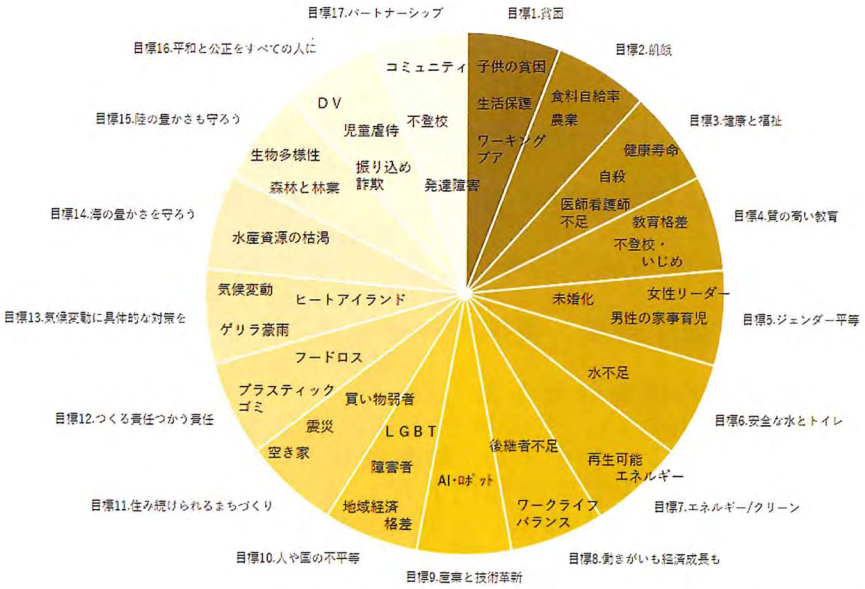
＜予選提出した未来レシピ＞



＜【日本遺産部門】絵コンテ　一部抜粋＞



＜ＳＤＧｓ×地球課題＞



継続可能な地域の作り方　筧　祐介著

＜各班の取材の様子＞

浦村牡蠣養殖場見学

臼井織布株式会社

志摩自然学校

相差かまど

＜予選の結果＞

【日本遺産部門】は『海女(Ama) に出逢えるまち 鳥羽・志摩～素潜り漁に生きる女性たち～)』、【ＳＤＧｓ修学旅行部門】は『人と自然が織り成す結晶、真珠の神秘に迫る旅』の２作品が準決勝に進むことができた。(「日本遺産部門」は８７チーム応募の中１９チームが、「ＳＤＧｓ修学旅行部門」は、３３１チーム応募の中２０チームが準決勝に進出した。)

２つの班は、再度取材を重ね、１８０秒の動画作成に取り組んだ。(両作品とも決勝に進出することはできなかった)

＜準決勝進出の２作品動画＞

（ｂ）高校生ビジネスアイデアコンテスト

観光甲子園に残念ながら予選敗退になってしまった３つの班について、日本経済大学主催の『高校生ビジネスアイデアコンテスト』にエントリーした。このコンテストは、持続可能な社会の構築に向け、地域や社会の課題を解決するビジ

ネスアイデアを公募するものである。観光甲子園で探究した内容をそのままビジネスアイデアに転換し、地方創生を意識したアイデアをエントリーした。

○アイデア名　：SDGs×地元伊勢志摩 ツアー
　キャッチフレーズ：美味しいものがたくさん！観光地たくさん！そんな魅力的な伊勢志摩を五感全てで感じながら、楽しくSDGsについても学べる、今までには無かったツアーを！

○アイデア名　：自転車防犯＆運動量チェック
　キャッチフレーズ：Bike　guardian

○アイデア名　：JK　presents　伊勢木綿ツアー
　キャッチフレーズ：～今までで一番素敵な伊勢の旅～

結果は、残念ながら予選通過することはできなかったが、どの班も観光甲子園で考えたテーマを短い期間の中でどのようにビジネスに結ぶことができるかを考えることができた。

（ｃ）株式会社ＪＴＢコンペ

ここまで探究活動を繰り返し行なってきた観光甲子園の内容を軸に、以下の観点で株式会社ＪＴＢ様にむけて旅行コンテンツコンペを行なった。

・伊勢志摩地域の「まちひとしごと総合戦略」の分析
　行政が見据えているビジョンを知ることで、より的確な観光コンテンツを提案できると考え、それぞれの総合戦略を分析した。

・ビジネスの視点を取り入れる。
　良い発案があったとしても、利益の見込みがないもの、実現することが困難な提案は商品にならないので、原価設定や販売価格設定まで深く考えることにした。

・地球課題解決×三方よし（世間よし、お客よし、企業よし）
　ＳＤＧｓの視点をもって、地球課題を解決できる提案を、そして世の中のためになること、お客様も喜ぶ、そして企業の成長にもなるような提案を心がけたい

＜今回提案された旅行コンテンツ＞

○密猟ラップの体験コンテンツ
　伊勢は伝統文化が多く、歴史的な町並みが広がっている⇒美容に良いものに注目

○伊勢木綿デザイン体験
　伝統工芸品で地元を盛り上げたいという職人さん達の想いを発信し知名度向上と地域活性化に貢献したい。

○ＳＤＧｓの謎解きプランコンテンツ
　地域の魅力やＳＤＧｓのことについて関心を持ってもらう。

○海女文化に出逢う旅
　体験を通して、資源や後継者の不足からなる、衰退しつつある海女文化に興味を持ってもらう。

○真珠の取り出しとアコヤガイの貝柱を食べる体験コンテンツ

（３）成果と課題

今年度２年目となった課題研究「観光とビジネス」で、「地方創生×ＳＤＧｓ」を探究し得られたことは、取材を通しグリーンツーリズムを体験したこと、交流が観光の多様化を生むこと、地域と訪問者を結ぶ存在として、必要とされる力の育成であった。そして、動画制作から取材のアポイントまでサポートいただいた、「伊勢志摩ビデオサービス株式会社」の堀江しおん様、また、１学期にテーマを決めるきっかけをいただいた「株式会社伊勢志摩ツーリズム」西田宏治様、「海島遊民くらぶ」江崎　貴久様には伊勢志摩ツーリズムの志の話を聞かせていただき広い視野で地域課題に取り組むことができるようになった。

グループで観光プランを立案することで、思考・協働といった学習活動や地域との連携におけるコミュニケーションを通じて、「考える力」、「コミュニケーション能力」、「グループで働く力」などの社会人基礎力が身についたと感じる。

今後の課題は、単年度で研究が終了するのではなく、継続して研究できるテーマ作成を行い、コンテストや企業コンペで発表、さらにはインバウンド観光回復を見据えた発信を行なっていきたい。

第５節　国際交流プログラム

１　モンバルク校とのWeb授業交流

（１）　経緯

本校は、平成６年３月にオーストラリアの高等学校モンバルク・カレッジと姉妹校提携を結び、現在に至るまで提携事業を続けている。この事業では、生徒及び教員の相互の派遣を行い、ホームステイ・授業・特別活動等を通じて交流をし、相互の国の文化や社会について理解を深めるとともに、生徒の英語による理解力・表現力を向上させ、国際化時代に対応できる高等学校教育の充実を図ることを目的としている。

例年９月にはモンバルク・カレッジの学生と教員が本校を訪問し、３月には本校の学生及び教員が姉妹校を訪問している。しかしながら、２０２０年３月に予定されていたオーストラリアへの訪問が、新型コロナウイルスの影響によりキャンセルとなって以降、現在に至るまで実際に生徒が行き来する形での交流ができていない。

そこで、何らかの形で交流ができる方法を模索し、昨年度は休校中のオンライン授業等で学んだノウハウを活用し、オンラインでＷｅｂ交流を一度行なった。その際は、簡単な自己紹介程度であまり議論を深めることができなかったため、今年度は時期を見て複数回実施することを計画した。

実際にオンライン交流をするにあたり、モンバルク・カレッジで日本語を担当している教員と本校の国際教育担当がメールで連絡をとりあい、２０２１年７月３０日（金）と８月２７日（金）に本校のＥＳＳ部員と、現地で日本語の授業を履修しているオーストラリア人の生徒との交流会を実施することとした。

（２）　Web交流

ア　１回目交流

（ａ）　日時・場所等

日時　２０２１年７月３０日（金）９：００～１０：００
（オーストラリア時間では同日の１０：００～１１：００に当たる）

場所　本校第２プログラミング室

会議システム　Cisco Webex

（ｂ）　交流内容と様子

今回の交流は、本校のＥＳＳ部に所属している生徒と、姉妹校モンバルク・カレッジにて日本語の授業を履修している現地生徒の今年度一回目の交流であった。

本校の生徒は２人一組のペアになり、モンバルク・カレッジの生徒も２人または３人の小グループにわかれ、小グループ毎に本校生徒は英語で、姉妹校の生徒は日本語で自己紹介をしあった。モンバルク・カレッジの生徒は日本語で質問をし、本校生が簡単な日本語で答え、後に本校生が英語で質問し、姉妹校生徒が英語で答えるという形で交流を行なった。

オンラインでの会話は、音声がそれほどクリアでなく、また相手の表情が分かりづらいため多くの生徒は苦労していたが、身近に姉妹校の存在を感じることができた。

（Ｗｅｂ会議システムを利用し姉妹校と交流する生徒）

イ　２回目交流

（ａ）　日時・場所等

日時　２０２１年８月２７日（金）９：００～１０：００

（オーストラリア時間では同日の１０：００～１１：００に当たる）
場所　本校第２プログラミング室
会議システム　Cisco Webex

（ｂ）　交流内容と様子

前回の交流は互いの事を知るための簡単な交流だったので、２回目になる今回の交流では、ＳＤＧｓに関連した内容を扱い、互いの国で自分たちが行なっている環境に配慮した暮らし方について話し合う機会とした。

現地で日本語を学ぶ生徒たちが、授業の一環として取り組んだ環境に関する日本語のプレゼンを披露し、そのことについて互いに質問し合い議論を深められるよう取り組んだ。当日は新型コロナウイルス感染拡大により、生徒たちが登校出来なかったので、モンバルク生も本校生も全員が各自の家からオンラインミーティングに参加した。それぞれの端末から会議に参加しているので、最初は誰も相談できる人が近くにいなくて、なかなか質問や意見も出づらかったが、徐々に勇気を持って発言する生徒が増え、最終的には難しいながらもそれぞれが一生懸命できる範囲で意見交換に参加することができた。

（オンラインで交流する両校の生徒）

（姉妹校生徒が作成した日本語のパワーポイン資料）

（３）　生徒アンケートより

・コロナの影響で海外の高校生と交流することが難しい中、オンラインを使って互いの国について知る機会ができてとても嬉しかった。オンライン交流をしたことで、日常で使うことばの言い回しから、食、アニメなど、様々な分野について知ることができた。オンラインなので聞きにくく、難しい場面もあったが、何とか会話を繋げようと気持ちを持つことができたので、いい経験になった。

・コロナ禍ではあったが、直接顔を見て話ができて良かった。日本語と英語でお互いが上手く話せなくて苦戦したところもあったが、あまり英語を使って直接話すという機会がなかったから良い経験となった。まだまだ“直接会って話す”ということがこれから先いつできるか分からないので、オンラインでもまた顔を見て話がしてみたいと思った。

・同世代で海外の方々との交流が初めての経験だったので、とても緊張したが楽しかった。また、言葉の壁を感じることがあったので、次の機会までにもっと話せるようにしたいと思った。そして次は直接会って話ができたらいいなと思った。

・今年度もコロナウイルスの影響で交換留学が行なわれませんでしたが、モンバルクの生徒と交流できる機会があり安心しました。今年度は２回交流する機会を設けることができ、プレゼンテーションや簡単な会話を通して仲を深めることができたと感じています。オンラインでの開催ということもあり、多少のトラブルや言語の壁を感じることもありましたが、この先必ず役に立つ貴重な経験になったと思います。来年度は留学を再開し、より深く言語に触れる機会を作っていけたらいいなと考えている。

（４）　成果と課題

新型コロナウイルスの影響で、相互の学校間訪問ができない現状の中、今年度は複数回、このようにオンラインで交流できたことは、本校と姉妹校の提携事業の継続という点では非常に大きかった。今後、実際に生徒が行き来できる交流がいつ再開されるか不透明であるが、再開されるまでの交流として継続して行なっていきたい。